
とある魔術の大作戦

クロロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の大作戦

【Nコード】

N5596N

【作者名】

クロロ

【あらすじ】

初恋の人・上条当麻とのハッピーエンドを掴むために過去に戻って頑張る話です。

「とある〜シリーズ」にドラマ「プロポーズ大作戦」を合わせてみました。

プロローグ（前書き）

初投稿です。温かい目で見てやってください。

プロローグ

6月のある日

今日の主役を祝福するような梅雨の合間の晴天の日

とても大切に

好きだった

あの人が

自分ではない人と結

婚してしまいます

〜結婚式会場〜

司会「新郎のご友人からのお祝いの言葉でした」

今日、私はその人の結婚式で友人代表としてスピーチをしました

そして、結婚する2人には悪いけど、「どうしてあそこに座っているのが私じゃないんだろう」

そう思っている

もし自分に素直になっていたらあの人の隣りに、私があそこに座れたのかな？
もっとあの人に優しくしていれば変わった結果になっていたのかな？

出てくるのは後悔ばかり

あの頃に……戻りたい

プロローグ（後書き）

カップリングは誰がいいでしょうか。ご意見あればください。

名前を呼んだら結婚できますか 1 (前書き)

温かい目で見てやってください

名前を呼んだら結婚できますか 1

「はあ」

今日何度目か分からないため息が出る。

ちなみに今日は、

上条当麻と五和の結婚式。

そしてため息をついたのは、

初春「どうしたんですか御坂さん？ため息なんかついて。」

美琴「ん…なんでもないわ。」

黒子「お姉様も女の子ですから、結婚式やウエディングドレスに憧れていたのでしょうか。」

佐天「綺麗ですよね、五和さん」

そう確かに五和さんは凄く綺麗だった。

純白のドレスに、誰よりも女性らしい微笑をまとった彼女は、
今まで見てきた誰よりも綺麗で、幸せそうだ。

でも…心から祝福できない自分が悲しかった。

美琴（アイツが選んだのだから仕方ないのかもしれない…でも、

…あんなにアプローチしてたのに。

…私だって…結構頑張ってたと思うのよ？）

誰に言うわけでもないが、言わずにはいられない。

美琴（いつから私こんなに嫌な子になっちゃったんだろう…）

彼女がそんな思いを抱いていると、

司会「次はスライドショーです。」

アイツの友人だという司会者が、そう言うと、
舞台へ2人の男が上がっていった。

「はい！ここからはかみやんの大親友、土御門元春と、」

「五和の同僚、建宮斎字がお送りさせていただきます。」

司会が替わり、会場が薄暗くなる。

スライドショーが始まった。

このスライドショーは、新郎と新婦の成長の記録のようだ。
今は上条当麻の子供時代の写真が写っている。

（かわいい／＼／＼）

不覚にもそう思ってしまった。

そうしてスライドが進んでいくと、

土御門「これはかみやんの趣味のフラグ作『土御門！』…日常だ
にゃー。」

建宮「新郎はこの頃からフラグの量産を『建宮　！！』…紳士的な男だったよな。」

二人が話すたびにどこからか注意の音が飛んでくる。

美琴（あ、アイツが連続放火魔を捕まえたときの写真だ…）

そこには何人かの風紀委員と警備員、そしてとても疲れた様子の上条と不機嫌そうな美琴が写っている。

美琴（こんな写真いつ撮ってたの？）

見に覚えのない写真に興味を引かれる。

美琴（この時アイツはまた新しいフラグを立てて、それが気に入らなくてビリビリしたような…）

そういえば、アイツに女らしい姿を見せたことがあっただろうか。会っただけで嬉しかったのに、それを素直に伝えることが出来ず、いつも怒ってばかりだった。

もしも、もしも、あの頃に素直になれたら、

今日アイツの隣に座っているのは自分だったのかな。

そんなことを考えていると、会場が暗くなる。

「結婚式だというのに随分と後悔しているな君は。」

声をかけられて驚いた。自分の気持ちを言い当てられるとは思っていなかったからだ。

声のほうを見ると、また驚いた。

自分以外の全員がマネキンのように固まっているからだ。

声の主は30前後くらいの男だった。

黒いタキシードにシルクハットをかぶったその男は、
見る限り招待客にも見えるが…

「ちなみに今、この会場の時間を止めている。そして私が見えるのは君だけだ。」

美琴「！！何でアイツにも効いてるのよ!?!」

「新郎の右手のことか？私に触れれば元に戻るぞ。それに長くはもたないようだ。」

「!?!何で右手のこと知ってるのよ!?!まさかアイツを襲う気!?!」

驚いた。まさかアイツの右手のことを知っているなんて。

敵意は感じないが、用心するにこしたことはない、男を注視する。

「それはだな…とりあえずビリビリするのを止めてくれないか。

…彼は有名人だから私の所にも噂が届いていたんだよ。」

美琴「あんたは何者？能力者？それとも魔術師？返答しだいじゃ…」

「妖精だよ。」

美琴「…は？」

予想の斜め上に行く答えが返ってきた。

美琴「はあ…それで、どなたですか？」

妖精「信じていないな？これだから学園都市の人間は…」

これ見よがしにため息をつく。

美琴「…何よ。」

妖精「こつは考えられないか？ここは学園都市、
何があってもおかしくないとは思わないか？」

美琴「！？…それは納得だわ！！」

それでいいのだろうか？

妖精「それで、どうしてそんなに後悔しているんだ？」

美琴「いえ、ただ…もし私が素直になってたら、私があそこに座れ
てたのかなって。」

妖精「…ふむ、君なら引く手数多だろうに、彼に拘る理由はなんだ
？」

容姿端麗な彼女なら、男が放っておくはずがない。

美琴「…私の初恋だからよ…」

彼女は俯いてそう言った。

妖精「今からでも素直になれば、彼以上のいい男なんか直ぐに捕まえられるのではないか？」

美琴「多分…いいえ、それは絶対に無理よ。」

妖精「どうしてそう思う？」

男は美琴の言葉の続きを促す。

美琴「だって…他の男の人と一緒に居ても、アイツと一緒に居る事で感じられた暖かさも、楽しさも、なにも感じないの…。」

それに…私、素直じゃないし色々怒鳴っちゃったり…こんな私を貰ってくれるのアイツだけだもん。」

妖精「それはまた重症だな。」

その人が笑いながら言ったのでちよつとムカつときた。

美琴「それはどういう意味ですか!?!」

妖精「まあ落ち着け。オスカーワイルドはこう言っている…」

『男は女の最初の恋人になりたがるが、

女は男の最後の恋人になりたがる。』

君は、女であるにも関わらず、最初の恋を諦めたくないとか心から願っている。

この期に及んでも、まだあきらめきれずにいる。」

美琴「…そうよ。」

妖精「お前、気をつけないと度がすぎてストーカーとか色々ヤバイ事になるぞ。」

美琴「うるさいわね！」

無神経な言葉につい声が大きくなる。

妖精「君は、あの頃に戻りたいと願わなかったか？」

美琴は黙った。確かにそう願った。

あの頃に戻れば素直になってアイツに告白して。もしかしたらあそこに座れるかもしれない。

妖精「願ったんだな…。ならば叶えてやろう。」

美琴「え？ど、どどういう事？」

突然の言葉に驚きを隠せない。

美琴「君を過去に帰らせてやる、と言ったんだ。」

美琴「ほんとにそんな事できるの？」

妖精「おや、信じてないのか？ならそれでいい、結婚式の続きを楽しむといい。」

そう言っつて帽子を傾けると、扉の方へ歩いていく。

美琴「信じるわ!！」

美琴は怒声に近い声で言い放った。

妖精「ちなみに帰れるのはこの写真の時間のみだ。」

美琴「え〜、過去に帰るって言っても制限あるんですか?」

妖精「当然だ。過去の君に今の君が重なるんだ。

それを長々と続けるとしたら過去の君は存在しないことになる。当然今の君も。」

美琴「う!過去に帰るって色々大変なんですね。」

妖精「超宇宙技術とか、時間魔法とかそういうものなら、あるいは可能かもな。」

美琴「…ないんですか?」

妖精「少なくとも私は知らない。まあいい、

過去に戻るための合言葉は『・・・』だ。ポーズをつけて元気よくな。」

美琴「/ /そ…そんなこと言わなきゃダメなの? / /」

恥らう美琴に、

妖精「別に脱げとか言ってるんじゃないんだ。

それにこんなことを恥ずかしがってたら、告白もあの席に座るのも夢のまた夢だ。」

美琴「／／／うっ！、わかったわよ…言っわよ／／／」

妖精「それでいい。では行くぞ。『求めよ、さらば与えられん』」

美琴「ハレルヤ〜！、チャンス！！」

すると美琴の視界を眩い光が覆いつくし、

美琴「きゃあああああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

運命を変えるために、過去への旅が始まる。

名前を呼んだら結婚できますか 2

「…か、聞いて…、…御坂！聞いているのか！」

美琴「はい！」

急に名前を呼ばれて、驚いた。

教師「どうしたんだ、ボーっとして？体調でも悪いのか？」

美琴「すみません…ちょっと考え事をしてました。」

教師「お前はレベル5だからいろいろと苦労があることは分かる。だが、学生なのだから授業はちゃんと受けないとダメじゃないか。」

美琴「気をつけます…」

教師「では授業を続ける、次は…」

美琴（本当に過去に戻ってきたのね、えっと、これからどうするか考えないと）

授業そつちのので、美琴は思考の海に潜って行った。

美琴（あの放火魔と一緒に捕まえればいいのか？でもそれだけじゃ足りないわよね…何とか距離を縮めないと…）

キーン・コーン・カーン・コーン

そんなことを考えていると、考えがまとまる前に、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

美琴（いいアイデアが浮かばない…誰かに相談しようかしら…）

美琴は悩みに悩んだ結果、恥を忍んで相談することにした。

Q：人と仲良くなるにはどうしたらいいですか？

生徒1「一緒にお食事でもしたらいかがですか？」

美琴（悪くはないんだけど今回は時間がないのよね）

生徒2「川原で喧嘩をすれば、友情が結ばれると聞いたことがありますわ。」

美琴（それはいつもやっていたし、アイツには逆効果なのよね）

生徒3「トーストを啜って曲がり角でぶつかるのが1番です!！」

美琴（何か方向が違うような…ていうかどんなラブコメよ!！）

生徒4「とりあえずファーストネームで呼んでみてはいかがですか?」

美琴（ファーストネームってことは、とっ…当麻って呼べばいいのよね…／／／）

考えただけで、顔から火が出るほど恥ずかしい。

ちなみに美琴は本人の前で『当麻』と呼べるようになるまで5年、しかも片手で数えられる程度の経験しかない。

美琴(このくらいしないと、とっ、当麻と結婚なんてできないわよね…)

でも、もし結婚なんてことになったら… / / /)

そんな乙女な想像をしている間に、美琴と当麻との出会いの時間が近づく。

- - - - -

美琴「とりあえずこの自販機の前で待っているのが一番よさそうね。」

美琴は当麻と出会うべく、いつもの自動販売機の前にいる。

美琴「いざ会つとなると照れるわね…でもここで頑張らないと…！」

そんな決意をした美琴のもとに一人の少女が近づいてきた。

佐天「御坂さーん!!こんなところで何してるんですか?」

美琴「佐天さん?今日は初春さんとは一緒じゃないの?」

その少女はいつも遊んでいるグループの一人、佐天涙子だった。

佐天「初春ですか?なんか最近放火魔が出て物騒じゃないですか。

だから『ジャッジメントの仕事が忙しい』って言って仕事に行っちゃったんですよ。」

振られました、と笑いながら言っている。

美琴「そうなんだ、早く犯人が捕まるといいわね（もうすぐ私が捕まえるんだけど）」

佐天「そうですね。それですね、さつきチラシをもらったんですけど新しくできたクレープ屋に行きませんか？」

そういつてチラシを美琴に手渡す。

美琴「（今はアイツに会うことが最優先だし）ごめんね、今日は…っ！！」

佐天「どうかしたんですか？」

断りを入れようとしたが、チラシの文字に、その言葉をふさがれた。

美琴（『先着50人に限定ゲコ太ピンバッジ』！？

どうしよう…ここを動くわけには…でもゲコ太が…）

ゲコ太と当麻の間で心が揺れる。

佐天「あの、もしかして何か用事ありました？それなら私一人で…」

美琴「私も行くわ！！（確か写真は夕方だったしまだ時間があるから大丈夫よね）」

写真の様子を思い出し、時間に余裕があると判断し、決断をする。

佐天「そうですか、じゃあ早速行きましょう」

美琴は前回にはなかった佐天とのクレープ屋へ向かうことにした。

- - -

二人は第6学区にあるクレープ屋にやってきた。

佐天「思ったより人がいますね。これはなかなか期待出来そうじゃないですか。」

美琴「そうね。じゃあ並びましょう!!（早くしないと私のゲコ太が）」

佐天「そうですね。」

2人は列の最後尾に加わる。並び始めたときには、二人の前には20人近くの人が並んでいた。

すると、

店員「はい、お譲ちゃん最後の一個だよ。」

女の子「ありがとう、おじちゃん」

あと10人ほどのところでピンバッジがなくなってしまった。

美琴「そんな…私のゲコ太が…アイツを待つのをやめてまで来たの

に……」

ショックを隠しきれず、地面にひざを付く。

佐天「えーと……大丈夫ですか？」

美琴の奇行に驚く少女。

ゲコ太の誘惑に負けた自分の行動に後悔していると、

当麻「こんなところで何やってんだ？」

そこにはここに帰ってきた理由、上条当麻がいた。

名前を呼んだら結婚できますか 3

美琴はあせっていた。

確かに当麻に会うために過去へ戻ってきたのだが、こんな形で出会うとは夢にも思わなかった。

美「な、な、何でこんな所にいるのよ!!」

だから、いつものようにケンカ腰になってしまった。

当麻「俺か？俺はこの子がこのクレープ屋を探してるっていつから案内してたんだよ。」

そう言った当麻の隣には、嬉しそうにクレープを頬張る、小学校の低学年くらいの女の子がいた。

美琴「アンタ、またそんなことしてるの？しかもそんな小さな子にまで手を出すなんて…」

当麻との突然の出会いにテンパってまた変なことを口走る。

当麻「ちよつと待つてくださいよ御坂さん!!」

上条さんがそんなことする訳ないじゃないですか!!」

当麻は周りにいる人たちに誤解されないよう、必死で反論する。

女の子「ねえねえおにーちゃん、このおねーちゃんはお友達なの？」

今までクレープに夢中だった少女が口を開いた。

当麻「ああー、一応そうなのかな？」

美琴（『一応』って何よ！！』『一応』って！！しかも疑問系！？）

当麻の言葉に少し傷つく美琴。

女の子「そーなんだ、でもダイジョーブだよ、おねーちゃん」

美琴「何が大丈夫なの？」

突然話しかけられて、少し驚く美琴。

女の子「わたしにはしょーらいを約束しただーりんがいるの！だからおにーちゃんの気持ちにはこたえられないの！！」

ごめんなさい、と可愛らしく手を合わせる女の子。

当麻「…」

美琴「そ、そうなんだ、すごいわね〜…」

少女の口から出た大人なセリフに言葉をなくす二人。すると、

女の子「あ、もうおうちに帰らないと。じゃあねおにーちゃん、ゲコ太だいじにするね〜」

当麻「ああ、気をつけて帰れよー」

そう言っつて少女はトタトタと駆けていった。

美琴「ゲコ太…」

当麻「ああ、あのカエルのことか。

いや、上条さんと一緒にいたら貰えないかな、なんて思ったけど、最後の一個で貰えたのですよ。」

テンションの低い美琴とは対称的に、限定品がもらえ上機嫌な当麻。

当麻「そういえばお前、あのカエルが好きだったよな？良か……」

美琴「そんなわけないわよ！！いくつだと思ってるの！！」

当麻に子供っぽいと思われたくない美琴は、ついムキになってしま
う。

美琴（もー、こんなんじゃないのに…）

なかなか素直になれない自分に自己嫌悪していると、

佐天「御坂さーん！！急に列から離れてどうしたんですか？」

そう言いながらクレープを二つ持った佐天が近づいてくる。

佐天「はい、これ御坂さんの分です。ところでそちらの人は御坂さ
んのお知り合いですか？」

クレープを渡しながら、興味津々といった様子で御坂に尋ねてきた。

美琴「ええ、『一応』ね。」

佐天「そうなんですか、初めまして、佐天涙子っていいいます。」

当麻「俺は上条当麻だ、よろしくな。」

そう言いながら当麻はすつと右手を差し出す。

佐天もその意味を理解し、当麻と握手を交わす。

美琴（いいな…って、ただ握手してるだけじゃない！！）

佐天（あれ？今御坂さんの表情が…もしかして！）

美琴の表情の変化を目ざとく見つける佐天。

佐天「上条さんは高校生っぽいですけど、御坂さんとはどういうお知り合いなんですか？」

当麻「うーん、御坂が不良たちに絡まれてるところを助けようとして、

逆に俺が絡まれて知り合った…かな？」

佐天「何ですか、その面白い出会い方はw」

当麻「いやー、上条さんもなかなか面白い体験をしたと思っているのですよ。」

ところで佐天さんは…」

2人は話が合うのか、どんどん話が進んでいる。
自分そっこのけで話が弾む二人を見て、

美琴（何で佐天さんはこんなに仲良さそうに話ができるのよ！！私なんかこんな会話ほとんどしたことないのに…）

美琴が羨望のまなざしで佐天を見ていると、不意に佐天と目が合う。

佐天「あ、私急用を思い出しました！御坂さんすいません、私帰りますね。」

美琴「ええ、気をつけてね。」

佐天の急な行動に、状況が理解できないといった様子でいると、美琴だけに聞こえるくらいの声で、

佐天「じゃあ、がんばってくださいね御坂さん！私応援してますから！！」

そう言い残して、佐天は小走りで店を後にした。

美琴（佐天さんに気づかれた…恥ずかしい／＼）

当麻「いやー、明るくて元気な子だったなと、じゃあそろそろ俺も帰るわ。」

美琴「（せっかく気を使ってくれたんだから）って、もう帰るの！？」

佐天がいなくなったとたんに帰ろうとする当麻に驚く。

当麻「お嬢様は知らないと思うけど、もうすぐスーパーのタイムセールスが始まるのですよ。」

「じゃあ」と言い、スーパーへ向かおうとする当麻へ勇気を出して、美琴「っね、ねえ、良かったら、つつつ、付き合っただけてもいいわよ。」

今言える、最大の勇気を振り絞って当麻に提案する。

当麻「マジですか！？今日の上条さんは不幸と別居中ですか！？」

当麻は了承してくれたようで、内心ほっとする。

美琴「馬鹿なこと言っていないで、さっさと行くわよ（これはチャンス、頑張るのよ美琴！！）」

この買い物の中に何とか名前を呼ぼうと決意した。

――

結果から言うと、うまくいかなかった。

スーパーへの道中は当麻を意識しすぎてほとんど会話が成り立たず、店内に入れば買い物客との格闘が始まりそれぞれどころでなかった。

当麻「いやー、今日は本当に不幸が旅行中みたいだな。」

美琴「はあー、今日はアンタの不幸が私のところに遊びに来てるみたいね…」

予想以上の戦果を得て上機嫌の当麻と対照的に、まったく戦果を上

げられず落ち込む美琴。

当麻「つと、早く帰って戦利品を冷蔵庫に入れないと。
じゃあな御坂、このお礼は今度するからな。」

美琴「え！？あ、ちっ、ちよつと待ちなさいよ！！…あ！！！！」

このまま別れるわけにはいかないと呼び止めようとしたとき、
ある男の顔が目に入った。

当麻「なんだ御坂？何かあったのか？」

美琴「アイツ最近話題になってる放火魔よ！！」

当麻「本当か！？つて、何でお前そんなこと知ってるんだ？」

美琴「えーと…黒子に聞いた犯人の特徴にそっくりなのよ。」

実際はジャッジメントでも犯人の特徴は分かっているのだが、
過去に戻ったことが知られぬよう、黒子の名でごまかす美琴。

当麻「でも、どうやって犯人が確かめるんだ？まさか、

『あなたが犯人ですか』つて聞くわけにもいかないだろ？」

美琴「…尾行するわよ。」

こうして、二人の尾行デートが始まる。

名前を呼んだら結婚できますか 4

男は大通りから離れた、人気のない路地の方へ歩いていく。

時折、周囲を伺つようにきよるきよるとして落ち着きがない。

美琴「やっぱり怪しいわね。」

当麻「だな。」

男に見つからないように建物の影に隠れながら二人は尾行を続ける。

と、急に男が後ろを振り返る。

当麻「ヤバっ、隠れろ!!」

当麻はとっさに美琴の腕を引き、ビル影に身を隠す。

美琴（ちよっ…ち、近い／＼）

急いで隠れたため、美琴はキスができるほど当麻と近づく形になった。

当麻「今のは危なかったな、これからはもっと気をつけないとな。」

「
そう言つて、何事もなかったように進んでいく当麻に、

美琴（なによ!!ちよっとくらい意識してくれてもいいじゃない!

！！)

反応に不満を爆発させる。

男が立ち止まる、その前にはゴミが山のように捨てられている。

男は手をゴミに向ける、すると急に煙が上がった。

当麻「アイツ！！」

言うが早いか、当麻は男に向かって走り出した。

当麻「お前！！なんてことやってんだ！！」

男「何って、こつやって捨てられたゴミを処分してるんだよ。」

男はそれが当然のように落ち着いた口調で答える。

男「こつやって学園都市をキレイにしているのに、何で君はそんなに怒っているんだい？」

当麻「馬鹿なこと言うんじゃない！！こんなことして誰かが火事に巻き込まれたらどうするんだ！！」

口論をしているうちにどんどん火の手が回る。

男「僕、怒られるのは嫌いなんだよね。」

そう言って男は路地の奥へ逃げ出す。

当麻「待ちやがれ!!!」

当麻が追いかけてようとすると、

美琴「ちょっと待ちなさいよ!!!当麻は右手を使ってこの火をなんとかしなさい!アイツは私が捕まえるから!!!」

美琴は冷静に、考えられる最高の作戦を立てる。

当麻「:分かった、気を付けるよ!」

美琴「誰に言ってるのよ!!!」

そう言い残して美琴は犯人を追いかけていった。

.....

美琴「待ちなさいよ!!!:待って言ってんでしょ!?!?!」

そう叫ぶと同時に電撃を放つが、犯人は曲がり角をうまく使いながら逃げていく。

「キヤーーー」

曲がり角の向こうから女の悲鳴が聞こえる。

男「しつこいから追いかけるの止めてくれない?」

そう言う男の腕の中には中学生くらい女の子が捕まっている。

女子「た、助けてください…」

女の子は震える声で助けを求める。

美琴「くっ、卑怯よ！！このままじゃ手が出せない…」

人質をとられては手を出すことができない。

美琴「って言うわけないでしょ！！」

ビリビリビリ…

女子「キャー…てあれ？なんともない…」

美琴「大丈夫？怪我はない？」

女子「は、はい、大丈夫です。」

男「くそっ、何で僕だけが電撃を…」

体が痺れて動けない男がつぶやく。

美琴「私はレベル5・御坂美琴よ。アンタだけに電撃を当てるくらいじゃないわ。

何よりアンタみたいに力に任せて女の子に手を上げるようなヤツに負けるわけないでしょ！！」

女子「御坂美琴…お姉様／＼」

当麻に立つはずのフラグが美琴に立った。

.....

黄泉川「いや、少年、お手柄じゃん。」

当麻「俺は火を消しただけですよ、褒めるなら御坂を褒めてやってください。」

連続放火事件が解決し、その功労者である当麻は労いを受けていた。

当「そういえば御坂はどこ行ったんだ？せつかく事件が…あ
あ！！俺の戦利品がない！！！！やっぱり今日も不幸だ…」

気が付いたときには、特売で手に入れた戦利品の数々が忽然と消えていた。

美琴「なーに落ち込んだるのよ。」

当麻「ああ、御坂か、旅行に行っていた不幸が帰ってきたのですよ…」

美琴「ふーん、じゃあこれあげるから元気出しなさいよ。」

そういつて美琴は手に持った袋を手渡す。

当麻「これは上条さんの戦利品じゃないですか！！御坂、いや御坂様！！ありがとうございます！！！！」

美琴「べ、別に気にしなくてもいいわよ、とっ、とっ、とっ、」

当麻「そうだ！！さっきのクレープ屋でもらったこれやるよ。」

そう言っただけで差し出したのは美琴の欲したゲコ太ピンバッジだった。

美琴「！？なんで当麻がそれを？最後の一個はあの女の子が持っているんじゃないの？」

当麻「これは49個目のピンバッジなんだよ。」

今日の幸運の記念にしようと思ってたけど、お前にもらって欲しいんだ。」

手にバッジを乗せ、目を見てそう言った。

美琴「（なに恥ずかしいこと言ってるのよ／＼）そ、そこまで言うならもらってあげるわよ／＼」

当麻「そういえば、今日は名前前で呼ぶんだな。」

美琴「へ？」

少し考えてみても心当たりがない

美琴（私、無意識に言ったの／＼でも、結果オーライよね！！）

美琴「いつまでも『アンタ』じゃあかわいそうだと思ったのよ！！
…それに他人行儀に呼ぶような付き合いでもないかなって思うし…」

少しの間、何かを考えるような表情の当麻を見て、美琴は大きな不安を感じる。すると、

当麻「名前で呼ばれればもう気が付かないこともなくなるだろうし、これからはそうしてくれよ『美琴』。」

美琴（！！！！…こいつ急にこんなこと…／＼／＼）

完全に不意をつかれ、何も考えられなくなった頭には、『名前を呼ばれただけなのにこんなふうなのかい』と『夕焼けでよかった』ということだけが浮かんでいた

名前を呼んだら結婚できますか 5 (前書き)

一段落着きます

名前を呼んだら結婚できますか 5

美琴「……あれ？」

美琴が目を開けると、いつの間にか結婚式場に戻ってきていた。

土御門「さーて、続いている写真はこちらだよー。」

写し出された写真は美琴が過去に戻った時のものようだ。

が、少し前とは違う印象を受けた。

美琴（ホントに過去に帰っていたのね…）

そう思っていると、会場が暗くなる。

妖精「君はやる気があるのか？」

急に声をかけられた。

美琴「…どういことよ。」

いきなりの辛辣な言葉に、一気に不機嫌になる。

妖精「どうもこうも無いだろ。せっかく過去に戻ったのに何もせずに帰ってくるなんて、期待はずれもいいところだ。」

男は呆れた様子で言い放つ。

美琴「そんなこと無いわよ！！私だって頑張つて『当麻』って呼べるようになったのよ。」

一気に話したのと少しの恥ずかしさで顔に赤みが差す。

すると、はぁー、とあからさまにため息をつき、

見るからに嫌そうな顔を見せる。

妖精「君は名前を呼んだくらいで恋仲になれるとも思ったのか？

…思ったんだな。まったく君は恋愛のレベルは0なんだな。」

こんなことを言われたのなら電撃のひとつでも浴びせてやりたいのだが、

言っていることの全てが事実なのだから全く反論できなくなってしまう。

妖精「君が戻って変わったことは、君たちの表情が変わっただけだ。」

そう言つて指差したスライドの写真にはスーパーの袋を持った当麻と、夕日でよく分からないが、

きつと真っ赤な顔をしているであろう、美琴が楽しげに話しをしている姿が写っている。

妖精「ちなみに、この次の日に彼に会った君は『美琴』と呼ばれたことに動転して、

照れ隠しに電撃を浴びせてな。せっかく縮まった距離がまた開いてしまつたぞ。」

美琴「そんな、何で…」

予想外の顛末に動揺が隠せない。

妖精「今の君なら問題ないだろうが、過去の君は素直になっていないからな。

当然の結果だと言えるだろう。」

美琴「……」

過去の自分の失態に、その原因の全ては自らの気持ちに素直になれなかった自分にあるのだから、もはや言葉も出なくなってしまふ。

妖精「君の願いは一応かなったな。ではこの後もパーティーを楽しむといい。」

男は右手を上げる。

美琴「ちよつと！ー！待ちなさいよ！ー！」

そう言い終わると同時に、男はパチツ、と指を鳴らす。

すると、世界に明りが戻る。

佐天「いやー、実は私、この頃は御坂さんと上条さんが付き合ってたんでしょ。」

佐天の一言に、美琴はドキツとする。

黒子「それはありえませぬわ。五和さんには悪いですが、

お姉様と上条さんではスパコンとその辺に落ちているネジぐらいの差なので、

天地がひっくり返っても交際に発展することはありませんわ。」

初春「さすが白井さんですね…」

美琴（過去に戻ったから今が変わってる…私はなんてチャンスを見失ったのよ!!）

自分の行動次第で今を大きく変えることができた。

その機会を逃してしまったことを改めて実感した。

そして、言葉が無意識に口から出ていた。

「不幸ね…」と。

おいしい料理を作れば結婚できますか 1

土御門「それでは次のスライドにいつてみるにゃー。」

スライドの写真が切り替わる。

建宮「この写真は？」

土御門「これはウチの高校で行われた料理大会の写真だにゃー。」

建宮「そうだったのね、確かこのときは新婦・五和が優勝を勝ち取ったのね。」

写真は五和や美琴をはじめ、何人も少女が舞台の上に立っている。

その中の中央に、トロフィーを抱え、満面の笑みを浮かべている五和がいる。

土御門「そうそう、この日を境にかみやんに猛アピールを始めたんぜよ。」

建宮「あれは凄かったのね、ほら、あのケーキを持っていったときの…『ちよっと、建宮さん!!』」

なぜか、2人だけで盛り上がっていく。

土御門「そうそう、まさか五和があーんなヒラヒラでフリフリで、小悪魔な格好をするなんてにゃー。今見せられなくて申し訳ないにゃー。」

建宮「あれは知っているか？五和が書いた…」

土御門「それは知らないにゃー、いったい何が…」

建宮「実は…」

その話は次第にエスカレートしていき、

神裂「いい加減にしなさい！！あなた達は、

今日がどんなに神聖な日なのか分かっているのですか！？」

完全に変なスイッチが入ってしまった二人に、ついに神裂がキレた。

建宮「いや、その…」

土御門「ねーちん、そんなに怒らないで欲しいぜよ。

今日は無礼講ってことで大目に見てもいいんじゃないかにゃー。」

建宮「そうなのね、二人の馴れ初めを紹介しているだけで…」

何とか怒りを鎮めようと努力するが、逆に油を注いってしまったようだ。

神裂「問答無用です…二人とも、ちょっとこっちに来て下さい。」

冷徹な顔で、冷たく言い放つ。

土・建「…はい」「

従わないと命はない。

そんな気がして2人はおとなしく会場を後にした。

-
-
-
-
-

初春「行っちゃいましたね、あの人たち大丈夫でしょうか？」

佐天「大丈夫じゃない？なんか二人とも丈夫そうだったし」

初春「そうですね。あつ、このチーズおいしいですね。」

司会者が消えても大した騒ぎにもならず、招待客同士の歓談が始まる。

初春「たしかこの料理大会って御坂さんも出てましたよね？」

写真を見て、思い出話が始まっていく。

黒子「ええ、このときは五和さんに次ぐ2位だったはずですよ。」

佐天「白井さんが答えちゃうんですね……」

美琴のことなら大抵のことなら答えられる黒子に、
一抹の不安を感じてならない。

初春「料理もできるお嬢様……まさに完璧じゃないですか……！」

黒子「当然ですわ。初春、あなた気がつくのが8年遅いですよ。」

料理大会の話して盛り上がる黒子達をよそに、美琴はこの頃を思い出していた。

美琴（このとき五和さんに負けちゃって……この時勝てていれば、
当麻が『美琴の料理は最高だ……！また作ってくれないか？』

みたいな事があつたかもしれないのに…)

今になって考えてみれば、当麻との距離をずっと近づけるチャンスだったのだ。

それを逃したことが今の結果に繋がっていると思うと…

美琴「あの頃に戻りたい…」

そう思った瞬間、周りが暗くなる。

妖精「このステーキは絶品だな。」

美琴「妖精さん!!来てくれたんですか!」

妖精「私も驚いているよ。今まで数え切れないほどの結婚式を見てきたが、

君ほど諦めの悪いヤツは2人目だ。」

美琴「そんなこと無いわよ!」

自覚はあるのだが、持ち前のプライドから絶対に認めようとしない。

妖精「ときに君は『初恋』というものをどう捉えている?」

突然の質問に、少し不意を突かれる。

美琴「どうもこうも、人生で一番大事な感情じゃない?」

美琴は素直に思ったことを素直に口にする。

妖精「どうやら君は少しは分かる人間かもしれないな。

人が心から恋をするのはただ一度だけである。それが初恋だ。この感情は他の何よりも尊い。」

テーブルに置かれた水を勝手に口にして、さらに言葉が続ける。

妖精「恋愛を一度もしなかった女はたびたび見つかるものだが、恋愛を一度しかしない女はめったに見つからない。君はその少数派になれるのか。」

『初恋は報われない』

そんな言葉が頭をよぎるが、

美琴「出来ます！ていうかやります！」

少女は強気に言い切った。

妖精「自分の殻を破れるのか？」

美琴「殻、ですか？」

妖精「彼の側にいた8年間で、一度も出来なかった事をやるうとしてるんだぞ？」

美琴「はあ……」

なんとなく、言いたいことは分かる。

妖精「口でいくらやると宣言したところで、自分の殻を破らなければ、そんな事出来るはずが無い。」

美琴「自分の殻ですか？」

妖精「このゆで卵貰うぞ。」

男はテーブルの中央に置かれたゆで卵の中から、1つを取り、

コンッ！

美琴の額にぶつける。

美琴「痛っ!!」

妖精「殻を破るということは、多少の痛みを伴うものだ。」

したり顔で話すこの男に、なんだか腹が立つ。

妖精「こんなことで怒っていても先が思いやられるな…

さて、そろそろ元気よく行ってみよう。『求めよ!、さらば』えられん『」

美琴「分かったわよ…ハレルヤ〜!チャンス!!」

美琴の視界を眩い光が覆い

美琴「きゃあああああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜」

美琴の二度目の挑戦が始まる。

おいしい料理を作れば結婚できますか 2 (前書き)

アドバイスがあればお願いします

おいしい料理を作れば結婚できますか 2

…

美琴「……………」

美琴が眼を開けると、

黒子「お姉さま、クレープを買ってきましたわ。」

黒子がクレープを私に差し出していた。

美琴「ん？何？」

黒子「お姉さまがご所望されたので黒子が買いに行つたのですが…
もしかしてストロベリーはお気に召しませんでしたか？」

ああ、私なんて気が利かない子なのですか！？」

美琴が咄嗟のことで反応できなかった。

そのことで粗相をしたと勘違いした黒子がすごい勢いで落ち込みだ
していた。

美琴「そんなこと無いわ、ありがとう黒子。」

罪悪感を感じてしまった美琴は、とりあえず話をあわせる。

黒子「ああ、お姉さま！なんてお優しいんですの！！

こんなダメな黒子を庇ってくださいるなんて…まさに天使そのもので
すわー！」

黒子との会話は美琴には懐かしく感じた。黒子も時とともに大人しくなっていて、最近ではこんなやり取りはなくなってしまっていた。

…らよかったのに、と思っていた。

実際はこの頃から何も変わらず、むしろひどくなった気がする。

高校に進学し、学校が変われば毎日50通ものメールが届き、寮へは毎日やってくる。

大学に進学すれば、キャンパスに潜り込んでくる始末だ。

さすがに黒子の将来が心配でたまらない。

美琴「まあいいわ、それよりこれからどうする？」

美琴（確か佐天さんに誘われて大会に出たんだっけ）

黒子「これからですか？えーと、もうしばらくしたら初春たちが来るはずですから、

それから予定を立てるのが良いと思いますの。」

美琴「そうね、そうしましょう。」

そう言って、二人は近くの公園へ向かい、初春たちを持つことにし

た。

- - -

初春「御坂さん、お待たせしました!!」

公園にいる自分たちの姿を見つけた初春が駆け足でやってきた。

黒子「遅いのです!!初春、お姉さまを待たせるなんて何をしましたの?」

大して待っていないのだが、黒子のご立腹のようだ。

佐天「まあまあ、そんなこと言わないでくださいよ。

ちゃんと面白いネタを仕入れてきましたから。」

美琴（来た!!）

美琴「面白いネタ?何かあったの?」

佐天が予定通りのことを言ってくれたことに、内心ドキッとしていた美琴だが、
表情に出さないように注意して聞き返す。

佐天「えっとですね、第7学区の高校で『料理大会』をやるらしいんですよ。」

黒子「料理大会、そのどこが面白いんですの?」

初春「優勝者には学園都市内のすべての店で使える商品券が50万

円分も貰えるらしいんです!!」

黒子の質問に、初春が答える。

黒子「確かになかなかの商品ですが、いささか俗物的で私には合いませんの。」

佐天「白井さんはあんまり乗り気じゃないですね、御坂さんはどうですか?」

少し悩んだようなフリをするが、答えは決まっていた。

美琴「せっかくだから出てみようかな。」

黒子「お姉さま!?参加なさるんですか?」

美琴の返事が意外だったようで、黒子が驚きの声を上げる。

佐天「さっすが御坂さん!!話が分かりますね。」

初春「料理もできるお嬢様なんて素敵です!!」

黒子「お姉さまの手料理をどこの誰とも知れない人に食べさせるなんて、なんてもったいない!!」

初・佐「…」

黒子の予想通りの答えに、さすがにあきれてしまっ。

佐天「じゃあ、早速行きましょー!!」

美琴「そうね、黒子は来たくなかったら来なくていいから。」

そう言つて美琴たちは会場へと向かった。

黒子「…私の扱いがひどくありませんか…」

-
-
-

初春「ここが会場ですね。」

4人は当麻の通う高校の正門前にやってきた。

佐天「まずは大会にエントリーしないと。」

そんな会話をしていると、受付らしき男が声をかけてきた。

「君たち参加希望の人？」

美琴「そうですけど。」

「では名簿に名前を書いて、奥で予選を受けてください。」

佐天「予選があるんですか？」

そんなことはチラシに書いてないため、確認を取る。

「思ったよりもたくさんの方の参加希望があったので、

予選をして上位の人たちが本戦へ進んでもらうことになったんです」

初春「そんなんですか、じゃあ本戦に進めるようにがんばりまじょうー!!」

エントリーをした美琴・佐天・初春そして黒子も予選を受けるべく校舎へ入っていった。

おいしい料理を作れば結婚できますか 3

美琴が公園で佐天と初春を待っているのと同時刻。

そこに、学生には見えない奇抜な格好をした人物と、どこにでもいそうな格好の人物が学園都市内を歩いている。

神裂「やはり学園都市というところは、いつ来ても賑やかなところですね。」

スタイル「そうだな、しかし土御門のヤツは僕たちをこんな所に呼び出して、

日本にいると言ったら『すぐに来い』なんて…」

五和「まあまあ、きっと何か大切なことがあるのでしようし。」

昨晚、日本での任務を終え休息をとっていたスタイルと神裂に土御門から連絡が来た。

珍しくまじめな調子で「学園都市に来て欲しい」と頼まれれば、普段の彼を知っているだけに

『何か重大な事件が起こったのでは?』と思い、急いで学園都市までやって来てしまった。

神裂とスタイル、そして二人をサポートするために、天草式から五和を含む数名が学園都市へ向かうことになった。

学園都市に到着した面々は、土御門の指定した待ち合わせ場所へ、迷いつつも向かっていた。

予定時刻よりも10分ほど早く指定された高台にある公園にたどり着いた時には、そこにはすでに土御門がいた。

土御門「ねーちゃん、わざわざ来てくれてありがたいにゃー。」

神裂「かまいません。それより私たちをここへ呼んだ理由を聞かせていただきたいですね。」

昨日の電話の時とは違い、くだけた様子の土御門に対して、一同はなにやら嫌な予感を感じ始める。

土御門「実はにゃー、ウチの学校で料理コンテストをやることになったんで、

ねーちゃんにその審査員をやって欲しいんぜよ。」

一同「…」

神裂き「…あなたはそんなことのために私を呼んだのですか？」

冷静を装ってはいるが、目には怒りが滲んでいる。

土御門「もちろんタダでは言わないぜよ。インデックスとの食事会と、

学園所有の保養所でのバカンスをセッティングするにゃー。」

インデックスとの楽しい時間を提供するという条件に、心を大きく揺さぶられる神裂。

五和「どうしたんですか女性教皇？ふるえてますけど…」

急に様子が変わったので、心配して五和が声をかける。

神裂「しょ、しょうがないですね、せつかく私を頼ってくれたのに、無碍にするわけにはいきませんね。」

少し赤い顔をしながら、言い訳じみた返事をする神裂を、一同はほほえましく見ていた。

土御門「交渉成立だにゃー、せつかくだから五和も出てみるかにゃー？」

急に五和を誘う土御門。

五和「私ですか？料理は得意ですけど、人前に出るのはちょっと…」

普段からあまり目立つことを嫌う少女は、やはり首を縦には振らない。

土御門「それは残念だにゃー、実は優勝者には50万円分の商品券が貰えるのに…」

五和「私は修行中の身ですから、そういうものはちょっと…それに普段はここにはいませんし。」

賞品をチラつかせても、少女は動じない。

だが、ここで飛び道具を使う。

土御門「別に自分で使わなくてもいいぜよ。例えば誰かにプレゼントすればいいにゃー。」

きつと喜んでくれて仲良くなれたり、お礼に何かしてくれるぜよ。」

五和が渋ることが分かっていたように、準備していたかのような五和を揺さぶる言葉を、わざとらしい口調で言い始める。

土御門「そういえばかみやんが、『今月もピンチだ』て嘆いてたにゃー。」

土御門の止めの一言が五和を襲う。

五和「せ、せつかくのお祭りですし、私も参加してみます。」

五和も顔を赤くしながら返事をしたが、神裂の時とは違い、なぜかニヤニヤした視線を送られていた。

土御門「それじゃあ会場に向かうぜよ。」

2人を案内するように、土御門が歩き出す。

ステイル「おい土御門、別にこんなイベントには興味は無いが、せつかく来てやった僕に何か言うことはないのか。」

土御門「別に無いぜよ。味覚オンチのニコ中英国人に食べくらべなんてできるわけ無いにゃー。」

土御門の一言に青筋を立て、今にも魔術を行使しようとポケットに手を伸ばす。

神裂「落ち着きなさい、あの子との楽しい時間のためです。ここは堪えてください。」

ステイル「…今回だけだぞ。」

せつかくの機会を不意にするわけにはいかず、渋々といった様子で手を収める。

土御門「じゃあ改めて出発にゃー。」

こうして五和の大会参加が決定した。

おいしい料理を作れば結婚できますか 4 (前書き)

短いです

おいしい料理を作れば結婚できますか 4

司会「皆様お待ちせしました！！ただいまより第一回、学園都市料理王大会を開催いたしまーす！！」

舞台の上に現れた、妙に元気のいい男の開会宣言に、会場に集まった生徒達から歓声が上がる。

司会「では、今回の大会について説明させていただきます」

司会「今日の午前中を使い、予選会を行いました。その結果、上位5人による決勝戦を行い、学園都市内で最も料理上手を決定します」

司会「そして優勝者には学園都市内の全ての店で使える商品券50万円と、もう一つ豪華商品を差し上げます」

司会「優勝者は審査員による投票と、会場にいる皆さんの投票で決定させていただきます」

司会「そして、優勝者に投票した方の中から抽選で10名様に1万円分の商品券を差し上げますので、どんどん投票してください」

商品券に反応してますます歓声が大きくなる

司会「さてさて、まずは今回の審査員の皆さんを紹介いたします」

そう言うと、舞台の左端の『審査員席』と書かれた場所に座っている3人へ注目を向けた

司会「まずは学園都市の教師代表、我らが愛する最小アイドル、ミス・アンチエイジング、月詠小萌先生！！」

小萌「おいしい料理を期待してまーす。それから、それ以上ふざけたことをぬかしやがったら補習ですよ？」

小萌先生の笑顔からは想像できない辛辣な言葉に、会場が一気に静まり返る

司会「私のことは気にせず盛り上がっていきましよう！！続きまして生徒代表、学園一の旗男のくせに不幸だとかふざけた事をぬかしてる我らの敵、上条当麻！！」

当麻「おい、お前！！俺のことをそんな風に思ってたのか！！」

多くの観客の前で侮辱され、声を荒げる。が、

司会「彼の言い分はスルーします。では3人目、今回のために外部からやって来てくれました。

見た目は奇抜ですが、とある料理の鉄人の弟子にして、神の舌を持つといわれる天才料理人、神裂火織！！」

神裂「土御門はいつたいどんな紹介をしたんですか…」

自分自身が訳の分からない料理人という設定に、困惑と呆れの入り混じった苦い表情をしている

司会「というわけで、この三人と会場の皆さんで、今回の優勝者を決定します」

司会「そして、お待ちかね、決勝戦に進出した5人の料理自慢を紹介いたします」

いよいよ登場する参加者を前に、会場のボルテージも最高潮に達した

おいしい料理を作れば結婚できますか 4 (後書き)

美琴と五和以外は誰にしたらいいでしょうか。

アドバイスがあったらください。

おいしい料理を作れば結婚できますか 5 (前書き)

料理って苦手です

おいしい料理を作れば結婚できますか 5

司会「それではこの舞台に進出した精鋭たちを紹介いたします」

そう言つて当麻たちとは反対側、舞台右側へ注目を向ける

司会「まずは1人目、見事に予選会をトップで通過したレベル5にして料理もできる完璧お嬢様、御坂美琴!!!」

司会者の煽りと共に登場した美琴に、観客から声援が送られる

美琴「このまま優勝して当麻と……/ / /」

佐・初「御坂さん!!!がんばってくださいー!!!」

佐天、初春をはじめとする美琴に憧れる学生からの歓声があがる

司会「2人目は健康オタクが嵩じて料理も得意、上条嫌いの我らが同士、吹寄制理!!!」

吹寄「まったく、うちが主催じゃなければこんな馬鹿げたイベントなんて出ないぞ」

「吹寄ー!!!罵ってくれー!!!」

歓声に混ざつて、なにやら危ない声も聞こえてくる

司会「3人目は外部からの参加、予選は2位通過のまさに大和撫子、五和!!!」

外部からの参加という珍しさもあり、大きな歓声が起こる

五和「か、上条さん！！私がんばりますから！！」

司会「上条君、後でじっくりお話ししたいですね…」

会場からも当麻に向け刺すような視線が注がれる

司会「ではでは4人目、もう一人の外部からの参加者、なんでも自らの名前の入った教会を持つほどの敬虔な修道女、シスター・オルソラ！！」

オル「私の料理を上条様に食べていただけるのですね。私、心を込めて作らせていただきますね」

「またアイツかよ！！」「女の敵ね」などなど、
会場中から当麻に向けた罵声飛び交う

当麻「不幸だ…」

司会「最後の1人、詳しい情報はありますが、今回のダークホース、シスター・インデックス！！」

当麻「インデックス！？なんでお前がそんなところにいるんだ？
というかお前料理できないじゃないのか！？」

イン「とうま、私のことを甘く見ないでほしいんだよ」

なにやら自身のありそうな、不敵な笑みを浮かべている

神裂「その通りです。あの子には『完全記憶能力』があるということをお忘れですか？」

当麻「つまり料理の仕方を記憶してるってことか？」

イン「そうなんだよ！今まで無駄にとつまやこもえの料理してるところを見てたんじゃないんだよ。それに完璧な作戦があるんだから」
そう言つて、これでもかと言わんばかりにない胸を張る

司会「もう進めてもよろしいですか？では、今回皆さんに作ってもらつ料理のテーマを発表いたします。」

5人の参加者と観客たちは一様にテーマの発表に注目する

司会「テーマはずばり『恋人に作る勝負料理』です！！」

テーマの発表を聞き、5人のうちの何人かは少し赤くなっている様にも見える

司会「それでは皆さん準備はよろしいですか？では……調理スタート！」

歓声と共に5人が一斉に食材の置かれたテーブルに向かっていく

司会「まずはインデックス選手、一目散に牛肉に向かっていきました。ちなみにあの牛肉は国産和牛で100gで5000円しまーす」

当麻「なんだと！？あの塊で俺の何か月分の食費なんだよ」

自らの貧乏さに打ちひしがれる

小萌「シスターちゃん、ステーキを焼くみたいですね」

神裂「素材の良さを最大限に発揮する調理方法ですね。すばらしい発想です」

会場からは「あれは料理なのか？」などと疑問の声が上がっているが、

神裂はあくまでインテックスの味方のようにだ

司会「吹寄選手とオルソラ選手は野菜を、五和選手は魚を選んでいくようですね。」

当麻「この3人は安心して見てられるな」

小萌「吹寄ちゃんの持っているあの野菜は何ですか？」

吹寄「これはケールですよ、先生」

神裂「どうやら青汁を作るようですね」

当麻「青汁って恋人に作るものじゃないだろ……」

健康オタクの行動に、一同若干の不安を感じる

神裂「オルソラは野菜を使ったパスタ料理、五和は和食のようですね」

神裂の言ったように、オルソラと五和はパスタと和食を手際よく調理していく

司会「御坂選手は圧力鍋を使うようですね」

当麻「ってことは、煮込み料理か？」

小萌「そうみたいです。材料を見る限りシチューだと思いますよ」

美琴「そうよ。楽しみにしてなさいよね！と、とと…当麻！！」

もはや会場からは当然のこのように、当麻への非難が向けられる中には「きゃー！！御坂さん大胆ですよ！！」「などという声も聞こえた

司会「どうやら、選手の皆さんの料理が見えてきたようですね」

徐々に会場中にいい香りが広がり、「お腹すいたー」という声も聞こえるようになった

イン「あああーーーー！！！！！！！！」

いきなりインデックスから大声があがった

イン「私のステーキがなくなってるんだよ！！」

当麻「…は？なに言ってんだよ、インデックス。さっきまで何万円分っていう肉がそこにあっただろ」

確かに数分前まで、そこには牛肉の塊が置かれていた。

しかし、それが忽然と消えたことに、ざわつき始める

司会「えーと、今入った情報によりますと、インデックス選手が自分で食べてしまったようですね」

イン「そんなこと無いんだよ！！ちょっとしか味見をしてなかったはずなんだよ！…たぶん…」

当麻「なんで自信なさ気なんだよ！！ていつか食っちゃったんだろ！？」

当麻の叱責の言葉に、ついに

イン「うるさいうるさい！！とうまが悪いんだよ！！たまにしか買ってくれないうえに、いっつもいっつも安いお肉ばかり買ってくるからなんだよ！！」

当麻に日ごろの不満をぶちまけながら、逆切れを始めてしまった

神裂「上条当麻、これはあなたが悪いですね。あの子にはちゃんとした食事を出していただかなければ困ります」

当麻「神裂さん、あなたはそっち側なのですね…」

司会「上条君、つまり彼女に料理を作っているということですか？」

若干の殺意を込めて、みんなの思いを代弁する

当麻「お前！！さっきからなんだよ、俺になんの恨みがあるんだ！！」

料理そつちのけで、言い合が始まってしまった

舞台上には『当麻の手料理』に思いを馳せた少女が何人かいたとかがいないとか

小萌「シスターちゃん、なくなってしまったものはしょうがないですから、

新しい料理を作ったほうがいいですよ」

イン「…こもえがそう言うならそうするんだよ」

そう言ったインデックスだが、その表情には先ほどまでの自身に満ちた表情は全くない

食材の前にやってきたインデックスだが、なかなか食材を手に取りうとしない

イン「えつと…確かとうまは、よくたまごを使っていたんだよ…」

神裂「どうしたんですか？あなたの記憶力を使えば料理の一つや二つ、簡単なことではないですか」

ここへ来ての急ブレーキに、さすがの神裂も取り乱し始めた

当麻「…神裂、オレ気づいたことがあるんだが」

神裂「なんですか？こんな大事なときに…」

当麻「確かにインデックスはオレの料理してるところを見てたよ。

でも、アイツの見てたのはいつも『うしろ姿』なんだ…
だから実際に作ってるところなんて本当はないんだ!!」

小萌「確かにそうですね。たぶんウチに来たときも『焼き肉』くらいしか
作ってるところを見てないと思うのですよ」

審査員たちがインデックスについて話しているうちに、インデックスは自分の調理場へ戻っていった

当麻「インデックスのやつ何を持っていったんだ？」

司会「えー、手元には玉子とイワシ、それにコンニャクとローズマリーがありますね」

審査員「…」

インデックスの手元に置かれた食材の組み合わせに、一同絶句する
司会「さーて、いろいろありましたが、まもなく調理時間終了です。
す。

皆さん、最後の仕上げをお願いします」

まもなく審査の時間がやってくる

おいしい料理を作れば結婚できますか 5 (後書き)

アドバイスがありましたら、どんどんください

おいしい料理を作れば結婚できますか 6 (前書き)

感想・アドバイスあったらお願いします

おいしい料理を作れば結婚できますか 6

司会「さー、これから審査員の皆さんによる試食です」

司会「では、料理のできた順に試食していただきます。まずはオルソラ選手から、お願いします」

そう言うと、当麻たちの前に料理が運ばれてくる

オル「私が作らせていただいたのは、『春野菜のカルボナーラ』と『シーザーサラダ』でございます。どうぞ召し上がって下さい。」

当麻たちは料理を口へと運んでいく

小萌「うーん！濃厚なソースとパスタが良くからまっておいしいです！ー！」

なかなかの高評価のようだ

司会「次は五和選手の料理です。」

五和「はい、私は『ちらし寿司』を作りました」

料理が運ばれ、当麻が口にする

五和「どうですか？か、上条さん！ー！」

顔を真っ赤にしながら当麻に質問する

当麻「ああ、かなりうまいよ。前よりもうまくなったんじゃないか？」

五和「本当ですか！？私…その…上条さんに食べてもらいたくて…」

司会「3番目、吹寄選手、お願いします。」

五和の言葉はさえぎられた。そして、吹寄の料理が準備されていく

吹寄「まずは食前に飲み物をどうぞ」

そう言っただけで目の前に青汁が置かれる

神裂「名前は聞きますが、実際に口にするのは初めてですね」

神裂はグラスを傾ける

神裂「…噂には聞いていましたが、独特の味ですね」

どうやら神裂の口には合わなかったようだ

小萌「そうですか？この独特の味がいいんじゃないですか」

小萌先生には好評のようだ

吹寄「メインは『すっぱん鍋』です。」

小萌「おお、これでお肌ツルツルですね」

神裂「これは生々しいですね…」

またもや小萌には好評で、神裂には不評のようだ

司会「4番目は御坂選手の料理です。」

美琴の料理が並べられる

美琴「私の料理は『ビーフシチュー』よ。」

当麻「おお、これもうまそうじゃん！」

口に運ぶ当麻、それを不安そうに見つめる美琴

当麻「うまい！！俺の好みのだ真ん中の味だ！」

「おいしいですねー」と小萌も神裂にも好評だった

美琴「当然よ！私がつつたんだから（良かった）、詩菜さんに料理習ったお陰ね）」

強がっているが内心はドキドキだった

司会「最期はインデックス選手の料理です。」

イン「ちょっと予定とちがったけれど、うまく出来たと思うんだよ

インデックスの料理が運ばれる。が、

当麻「これってコンニャクのまんまじゃねーか！…！」

目の前の皿には板コンニャクがそのまま置かれている

小萌「田楽ってことなんじゃないんですか？」

そう言っつてコンニャクに箸を入れると、

ゴポツ！！

その瞬間、およそ料理には似つかわしくない音が聞こえた

当麻「あのー、インデックスさん？これはいったいなんでしょうか？」

イン「えーと…海の幸のコンニャク包み？」

謎だった

...

神裂火織は今まで数々の修羅場を潜り抜けてきた。

何十もの魔術師に囲まれた。不完全とはいえ天使とも対峙した。

そして今、神裂は目の前の料理からそのときと同等の、

下手をすればそれ以上のプレッシャーを感じていた。

まず落ち着いて考えましょう。あの子が使った食材は『玉子』と『イワシ』に『ローズマリー』。

では、あのパステルカラーの液体はなんでしょうか？

青に黄、赤に緑。こんな物体…いえ、料理は見たことはありません…

これを口にしても平気なのでしょうか…

当麻「おい！！なんだ、この物体は！！どう考えてもヤバいだろ！！」

司会「だから『最期』の料理と言ったじゃないですか」

またもや当麻と司会の言い合いが始まる

イン「とうま、わたしのことをバカにしてるね」

インデックスさんは不機嫌のようだ

司会「とにかく、食べてもらわないと審査になりませんから、一口でも食べてください」

その言葉に神裂の肩が震える

それに気が付いた当麻がそっちを見ると、追い詰められた表情の神裂がそこにはいた。

そして、うわごとのように「私が食べなければ…」とつぶやいている

当麻「分かった、俺が食べる！！先生と神裂は食べなくていいぞ」

その言葉に神裂は

神裂「待つてください！あなただけが食べるとはどういうことですか！？私にもあの子の料理を食べる義務があるんですよ！」

当麻「どうしてそう思うんだよ？」

当麻はいつもより若干低い声で質問する

神裂「私は審査する者として公平にする必要があります。

それに…あの子が初めて作ってくれた料理を食べないなんて…
そんなことをしたらあの子が…」

そんな神裂の言葉に

当麻「そんなの間違ってるだろうが!!」

当麻が吼える

当麻「お前、それでインデックスが喜ぶなんて思ってたのか!?!
そんな辛そうな顔で食べもらっても、うれしいなんて思うわけない
だろ!!」

それに、どうせ神裂は無理して褒めるつもりだったんだろ？」

神裂「それは…」

図星を突かれ、神裂は言葉に詰まる

当麻「そんなことしてもアイツは喜ばないし、仲良くなんて、昔み
たいに戻るわけないだろ!!」

神裂「ですが、私はどうしたらいいんですか…」

困惑した、今にも泣き出しそうな表情で訴える

当麻「そんなの簡単だろ。友達なんだから本当のことを言えばいいだろ。それから、アイツと一緒に料理を作ってやれよ。」

神裂「あの子と私が…そんなことが許されるのでしょうか…?」

当麻「当たり前だろ！お前はアイツを信じてないのか？」

神裂「そんなことがあるはずがありません!!」

その言葉に素早く反論したが、顔には未だに暗さが残る

当麻「それなら大丈夫だろ。もし、まだ不安が残ってるんだったら」

そう言いながら、インデックスの料理を箸で掴み、

当麻「俺がその不安をぶち殺す!!」

料理を口に突っ込んだ

一同が息を呑んで注目する

小萌「上条ちゃん、どうですか？」

先ほどまで涙目だった小萌先生が不安そうに尋ねる

当麻「……」

司会「上条君？反応がない。ただの屍の…って、冗談ですよ！そんな恐い顔しないでくださいよ」

不謹慎なことを言おうとした司会に、当麻に好意を持つ者たちからの視線が刺さる

神裂「……！？気絶しています……！」

上条当麻は一撃で沈んだ

おいしい料理を作れば結婚できますか 7

司会「以上、学園都市で最高のドクター・冥土帰しの治療でした」

ステージの上では、当麻の専属医といっても良いであろう、カエル顔の医者による治療が行われた

カエル「やれやれ、いったい何をどうすればこんな料理<毒>が作れるのやら…」

少女達が当麻の治療を心配そうに眺める中、美琴はなにやら嫌な予感がしていた。

美琴（なんか忘れてるような気がするのよね…あいつが倒れて…）
などと考えていると

当麻「…うん…、なにかひどい目にあったような…」

当麻が目を覚ました。ほっと一息つき、声を掛けようとすると、

神裂「上条当麻！ー良かった…」

そう言っつて神裂がいきなり当麻を抱きしめた

神裂「上条当麻、あなたのおかげで心が晴れました…ですが、また借りを作ってしまいましたね」

当麻「なに水臭いこと言っつてんだよ。俺たちは遠慮するような仲じ

やないだろ？」

神裂「上条、当麻……」

なんだかとてもいい雰囲気になりかけている二人

美琴「な、なにやってんのよ……とにかく、早く離れなさい……！」

美琴はこのハプニングを完全に忘れていた

当麻「え！？あ……！！か、神裂サン？離れていただかないと、とても嫌な予感がするのですが……」

そんな当麻に

ゴン……！！！！

吹寄の一撃が贈られた

……

司会「いろいろありましたが、結果発表です」

ステージ上には緊張した面持ちの少女たちと、顔を真っ赤にした神裂、たんこぶを作った当麻、そして微笑ましそうな顔の小萌がそのときを待つ

司会「一気にクライマックスってことで、優勝は……」

会場が息を呑む

司会「優勝は…五和さんです!!」

五和「私が!?!? やりました!?!」

会場から大きな歓声が起こる

美琴「うそ!なんで…」

自信があっただけにショックが大きく、膝を着いてしまう

司会「2位は御坂さん、3位はオルソラさんでした。ちなみに1位と2位の差は10ポイントでした。」

美琴「そんなちよつとの…」

僅差での敗北にさらにショックを受ける

当麻（アイツ、なんであんな顔してんだ?）

悲しそうな顔をした美琴を見てなにやら複雑な感情を覚える

当麻「ていうか、採点っていつやったんだ?俺、点数なんて付けた記憶がないんだけど」

小萌「そういえば上条ちゃんが気絶しているときでしたね。」

当麻「なあ、公平にするなら俺が点数を付けてもいいだろ?」

司会「それはそうですが、結果が分かった後では公平にはなりません

んよ」

当麻「そうかもしれないけど、俺の結果は最初から決まってるぞ」

そう言っつて手元に置かれていた採点用紙を手渡す

司会「ちょっと確認しますね…分かりました。採点を認めるそうなので、改めて結果を発表します。」

再び会場が静けさに包まれる

司会「優勝は…同点で五和さんと御坂さんです…!!」

美琴「うそ!?!」

自分の名前を急に呼ばれて、驚きの声をあげる

司会「上条君の評価が高く、見事に御坂さんも同点優勝となりました」

美琴「当麻…ありがとう」

優勝したこともうれしいが、何より自分の料理が1番食べて欲しかった当麻に評価され、泣きそうになってしまった

- - -

司会「それでは表彰を始めます」

土御門「二人とも良くがんばったにゃー」

優勝した美琴と五和に賞状が渡される

司会「賞品ですけどどうしますか？半分づつに分けますか？」

この提案に

美琴「私はいらないわ。もともと2位だったし、五和さんに譲るわ。」

五和「いいんですか？私が貰ってしまつて……」

そんなやり取りがあり、

司会「では、五和さんに賞品を贈呈します」

土御門「良かったなー、これでかみゃんとのラブラブ大作戦に一步近づいたにゃー」

五和「ちょっと、なに言ってるんですか／＼」

からかわれて真っ赤になった

司会「では御坂さんには副賞の『南の島・7日間の旅』の方を差し上げます」

「「えー！！」」

小萌「なんだか副賞の方が豪華じゃないですか？」

小萌から当然の疑問が投げかけられる

土御門「学園都市の所有施設だから、予算的にはお安くなってるにやー」

「それなら納得だ」という感じで、コンテストは終了を迎えた

- - -

舞台上では二人の少女がお互いを意識しあっていた

五和（御坂さんといいましたか…この人も上条さんを…これは負けられませんね）

美琴（五和さん当麻のこと意識しまくりじゃない…これはのんびりしてられないわね！！）

美琴「ねえ、当麻」

当麻「何だ？つて、言つの忘れてたな。優勝おめでとう、美琴」

美琴「うん…ありがとう／＼／」

五和（あれ？いま名前で呼び合ってますでしたか？…これは積極的にいかないとマズイですね！！）

一人の恋する乙女が覚悟を決めて、

五和「上条さん！あの、その…もし良かったらこれを受け取ってください！！」

そう言っつてついさつき貰ったばかりの賞品を押し付けんばかりに、
当麻に差し出した

当麻「おいおい、それは五和が勝ち取ったものだろ？さすがにそれは受け取れねーよ」

五和「でも、私が持っていてでも使う機会がありませんし……」

いろいろと言っつてみたが、当麻はなかなか受け取るうとしなかった。そうしている間に折中案がもたらされた

小萌「じゃあ、みんなで打ち上げに行きましょう！学園都市最高級の『J.O・J.O苑』で豪華絢爛焼き肉パーティーでどうなのですか？」

イン「私も大賛成なんだよ！！とうまもいつわもいいよね？」

当麻「そういうことならいいんじゃないか？」

予想と違う展開が繰り広げられ、うろたえている間に話が決まってしまうた五和は、

五和「こんなはずじゃなかったのに……でもまだチャンスはありますし、ポジティブでいきましょう！！」

健気に頑張ることにした

美琴「当麻、その、私が貰った賞品だけど、良かったら一緒に行かない？（言っっちゃった！！は、恥ずかしい／＼／＼）」

顔を真っ赤にしながら当麻を旅行へと誘った

当麻「俺を？俺じゃなくて、白井とか誘ったほうがいいんじゃないか？」

美琴「黒子も後で誘うわよ。でも当麻も行きたいかなと思って、その、誘ってあげよう…」

顔を真っ赤にしながら自分を誘ってくれる少女。そんな姿を見て、自然と暖かな笑顔がふつと浮かぶ

当麻「ああ、せっかくだから一緒に行かせてもらおうよ」

美琴「うん!!」

見る者が恋に落ちてしまうような、最高の笑顔がいつぱいに咲いた

ボタンを貰えば結婚できますか 1 (前書き)

美琴さんぽくないかもです

ボタンを貰えば結婚できますか 1

女の名前は御坂美琴。

結婚式場に現れた、哀れな女である。

これまで何百という結婚式を見てきたが、新郎に対してここまで後悔している女は稀である。

そもそも、これ程悔いている人間というものは、式に参加しないものだ。

初恋であるが故、彼への思いをずっと伝えられなかったツケが、皮肉にもこんな形で巡ってくるとは…

しかも、二人を祝福するスピーチまで任されてしまうと、つくづく哀れな女である。

女はスライド写真を見ながら過去をやり直したいと強く願った。

見るに見かねた私は、写真の時代に戻る事を許可した。

私とは、無論、この教会に住む妖精である。

過去に戻ったはいいものの、変わったことといえば写真の彼の表情が少し和らぎ、名前を呼んだ程度。

期待はずれも甚だしい。

- - -

美琴「どういふことか、説明してもらおうじゃないの」

語気を強め、誰がどう見ても怒っていることが一目で分かるオーラを出した女が詰め寄る

妖精「説明？ジューンブライドの意味についてか？」

美琴「この状況よ！！コンテストで優勝した。一緒に旅行にまで行った。なのになんで私はあの席に座ってないのよ！！」

妖精「確かに今回の君はかなりの結果を残した。それは認めよう」

美琴「じゃあ、なんでよ！！」

妖精「人が結婚するって事は、並大抵の事じゃ無い。ただそれだけの事だ」

美琴「それは…そうだけど…」

妖精「自覚はあるだろ？ならば、事実を受け入れ、前へ進むことを考えるんだな」

そう言って、指を鳴らす

『パチッ！！』

次の瞬間には会場に明るさが戻る

- - -

「さて、次のスライドをご覧ください」

スライドが変わった瞬間、美琴の胸はこの上なく締め付けられる

「この写真は新郎の卒業式の写真です。同時に、お二人が恋人同士になって最初の記念写真でもあります」

そうだ

この日、当麻が高校を卒業して自分から離れてしまう気がした。

だから勇気を出して、関係が壊れてしまう恐怖に打ち勝って、思いを告げようとした。

でも、それは叶わなかった。

自分の見ている目の前で、大好きなその人が、自分じゃない、別の人の告白を受け入れた。

私は泣いた。寮に帰らずに何日も。

寮に帰った日、黒子は何も聞かないでくれた。ただ一言、『お帰りなさいませ』とだけ言ってくれた。

嬉しかった。黒子がこんな自分をまだ信頼してくれている。黒子は当然だと言うだろう。でも、その言葉で救われたような気がした。

同時に自分が許せなくなつた。自分を信じてくれる後輩、尊敬してくれる人たち。

レベル5という尊敬と羨望の眼差しを受けても、本当の自分は気持ち一つ口に出せない弱い人間だった。

そんな自分が嫌で、何度も後悔して、何度もやり直したいと思って。

でも、レベル5として、学園都市の頂点として、そのプライドで必死に気持ちを落ち着かせた。

気持ちの整理は着けたはずだった。でも、この写真を見たらどうしようもない、そんな思いが溢れ出す。

『あの頃に戻りたい』

今までで一番強く、抑えることは出来るはずもなかった。

バン!!

また暗闇に包まれる

妖精「また一段と後悔しているな。」

後ろから声がする

美琴「しょうがないでしょ!!まさか、まだこんな風になるとは思わなかったのよ…」

泣いてはいないが、その一歩手前というところだ

妖精「卒業式か。ダスティン・ホフマンが出演した卒業って映画は知っているか？」

美琴「あの結婚式の最中に花嫁を奪って逃げちゃった…」

妖精「実はあそこの教会にしばらく住んでた事があるんだ。」

美琴「マジですか!?!」

妖精「冗談に決まってるだろう。君は悪い詐欺に引っかかるらないように気をつけた方がいい。」

美琴「シロサギ?」

妖精「卒業を別れと捉える者もいれば…、旅立ちと捉える者もいる。もう会えなくなると寂しがる生徒もいれば…、もう会わなくて済むと胸を撫で下ろす生徒もいる。

卒業の日に抱えている思いは、卒業証書の数だけあるという事だ。

君は、本当に思いを伝える覚悟はあるのか?」

美琴「あるわよ!前はほんの少しタイミングがずれたただけだもの。今度はうまくやるわ。」

妖精「人は自分の不都合なことがあると、『まさか』や『偶然』という言葉に頼ろうとする悪い癖がある。

君は、今日だけで何回物事をまさかとで片付けようとした?

まさかスピーチで泣きそうになるなんて…

まさか先に告白されるなんて…

まさか彼が彼女と結婚するなんて…

物事には全て理由がある。私とこうして出会った事も、君が激しく後悔したって理由がある。

本質から目をそらしては、いくら過去へ戻ったところで何も変わらないという事だ。」

美琴「いつもと違ってカッコイイ!」

妖精「いつもと変わらずカッコイイ！これが本質だ。」会話を
するうちに心が落ち着いていくことがしつかりと感じられた

妖「もう大丈夫だろう。それでいい、では行くぞ。『求めよ、さら
ば与えられん！』」

美「ハレルヤ〜！、チャンス〜！」

美琴の視界を眩い光が覆いつくし

美「きゃあああああああああああ〜~~~~~」

.....

ボタンを貰えば結婚できますか 2

「御坂さん、前から好きでした！ボクと付き合ってください！！」

美琴「…は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

無理もない。気がついたらいきなり告白された。

しかも名前も知らない人からの告白だ。

周りをギャラリィが取り囲んでいるし…

これで完璧な対応が出来る人が…いそうだが、きっといない。

「返事を聞かせてくれますか？」

美琴「えー…ごめんなさい。あなたとはお付き合いできません。」

「そうですか…」

男子生徒は肩を落としながら不幸そうなオーラを身にまとい、トボトボと去っていった。

佐天「いやー、さすが御坂さんですね。今の人で何人目ですか？」

初春「9人目ですね。高校生が7人、中学生が2人でしたね」

美琴「佐天さんに初春さん！？いつから見てたの？」

佐天「最初から見てましたよ」

初春「やっぱり卒業式には告白は付きものですよね。」

「ね。」と二人で頷きあう

なんだか楽しそうな二人を見てみると、いらぬことを聞かれそうな気がしてならない。

美琴「二人の卒業式はどうだったの？」

佐天「それがですね、初春がわんわん泣いちゃって笑いを堪えるのに必死でしたよ。」

初春「佐天さんなに言ってるんですか！／＼／」

顔を真っ赤に染めながら抗議の声をあげる

美琴「初春さんらしいじゃないの。もしかしてこれから打ち上げ？」

初春「はい。これから白井さん達と小さなパーティーをやるんです。」

「

佐天「良かったら御坂さんも参加しませんか？きっと白井さん、泣いて喜びますよ。」

美琴「そうね、前は出られなかったから…ちょっと用事があったて遅れるかもしれないけど、参加させてもらおうわ。」

佐天「前？去年は御坂さんの卒業パーティーやりましたよね？」

しまった。自分にとっては『前』でも、彼女たちにとっては『今』なのだ。

美琴「ええーと、去年は常盤台のパーティーに出られなかったのよ」

初春「そうだったんですかー。残念でしたね。」

美琴（ふー、何とかごまかせたみたいね）

冬の寒さの残る春先、冷や汗をかくとは思わなかった。

-
-
-

佐天「そういえば女子って何で第二ボタンを欲しがるんですかね？」

立ち話もなんだ、ということ、3人はファミレスに場所を移していた。

初春「いろいろ言いますけど、御坂さんはどう思います？」

美琴「そうね…心臓が一番近いかじゃないかな。制服って、高校時代ずーっと身につけているものでしょ？」

だから、第二ボタンにはその人の想いがいっぱい詰まってるんだと思うの。」

話し終えたとき、二人は目をぱちくりさせていた。

美琴（また何かまずいこと言った？）

などと考えていると、

初春「御坂さんかつこいいです！まさに恋する乙女…ああ、お嬢様の恋！憧れます〜」

どうやら初春の琴線に触れてしまったようだ。

まずい。そう思わずにはいらなかった。

恋愛話は女の子の大好物。しかも身近な、憧れを持っている人なら尚更だ。

初春は目をキラキラさせている。

佐天はというと、少し考えるような素振りをしている。

ここで時間を使うわけにはいかない。ヘタをすれば同じ過ちを繰り返すことになってしまう。

美琴（うまく誤魔化さないと…何か…ああ、もう！いい考えが浮かばない）

焦りが募る。このままではいけないことは分かるが、うまい言い訳が浮かばない。

佐天「初春！あれ佐藤と鈴木じゃない！？やっぱりあの2人できてたんだ。」

初春「あの2人ですか！？いったいどこにいるんですか！？」

佐天が指差した先はビルの間にある細い路地だった。

初春「見えました！やっぱりそうだったんですね…」

初春は興奮気味に路地を見ている。

美琴からは車の陰に隠れて一人しか見えないが、そこには長身の男子生徒が見える。

美琴は2人のクラスメイトが告白でもされてるのでは、と予想を立てた。

しばらくすると車が動き、路地の様子がはっきりと見えるようになった。

目に写ったのは2人の『男子生徒』が第二ボタンを交換し合っている姿だった。

卒業証書の数だけ思いがある。それを痛いほど実感した。

ボタンを貰えば結婚できますか 3 (前書き)

感想・アドバイスあったらお願いします

ボタンを貰えば結婚できますか 3

ある意味衝撃的な光景を見た後、
最初に口を開いたのは佐天だった。

佐天「初春、そろそろ白井さんとの待ち合わせの時間じゃない？」

初春「あ、本当ですね。」

初春の興味が自分から逸れてから、
思っていた以上に時間が過ぎていた。

美琴「そうなの？じゃあそろそろ店を出ましようか。」

内心、ホツとしている美琴の提案で、この場は解散となった。

- - -

初春「じゃあ御坂さん、後で場所をメールでお知らせしますから、
ぜひ来てくださいね。」

そう言い終わると、初春は手を振りながらバス停へ向かっていった。

美琴「どうしたの？佐天さんは一緒に行かないの？」

初春が歩き出したにもかかわらず、佐天はまだ美琴のそばにいた。

佐天「御坂さん、聞きたいことがあるんですけど、
聞いてもいいですか？」

佐天はいつになく真面目な顔をしていたが、未だ焦りの残る美琴にはそれが分からなかった。

美琴「別にかまわないわよ。何が聞きたいの？」

佐天「もしかしてこれから上条さんに会いに行くんですか？」

美琴「…え？」

完全に意表をつかれた。

先ほどの様子だとこのようなことを聞いてくるのは初春のほうだと思っただけに、

美琴「へ、変なこと言わないでよ。何で私が当麻に会いに行かないといけないのよ」

そう言ってみたが、佐天の表情は変わらない

佐天「2年くらい前でしたっけ？私が上条さんに会ったときにピーンと来たんです。

あの時からずっと、上条さんが好きなんじゃないかって。

普段から上条さんのこと気にしているのが分かりましたし、今だって名前で呼んでましたし。」

美琴は何も言わない。そのことを気にしつつも、佐天は言葉を続ける。

佐天「別にからかうとか、そんなこと考えてないですよ！むしろ応援しています。」

だから御坂さん、頑張ってきてくださいね!」

美琴「佐天さん…その、ありがとう…」

自分に思い人がいることを知られてしまっではいけないものだと思っていた。

茶化されたくない。周りから干渉されたくない。黒子がうるさい…いろいろ思うところがある。

恋愛は常に自分本位であり、それ以外の何者でもない。

それを他人に告げること、応援してもらうことは自分のわがままだと思っていた。

そして何より、応援してもらった結果、理想の結末にたどり着けなかったら…

そんなことは無いと言いかもしれないが、期待を裏切ってしまうことになるんじゃないか…

そんなことを考えると、自身の恋愛に関しては一人でやるものだと思うようになってしまった。

でもそれは違ったのかもしれない。

目の前にいる少女は自分から、自分の意思で応援してくれている。よくよく考えるとあのおかしな妖精も、本気かどうか怪しいところもあるが、

自分のためにこんな魔法みたいなことをしてくれている。

わがままと思わずに、自分のことを本気で思ってくれている。

親友と言える彼女たちになら伝えておくべきだったろう。そうすれば後悔することもなかったかもしれない。

少なくとも『今』、彼女の言葉を素直に受け取り、前に進んでいくことが大事なんだと、そう思った。

美琴「私、正直言うと不安だったんだ。もしかしたらって、前にも同じようなことがあったからまた…なんて考えちゃって。でも大丈夫！佐天さんが応援してくれたからなんだか勇気が湧いてきた！」

佐天「御坂さんはそうでなくっちゃ！大丈夫です、こんなかわいい人に告白されて断る人なんていませんよ！それに、上条さんも御坂さんのこと気にしてるって、私の勘が言ってます。」

美琴「そんなに言われるとなんだか照れるわね…
うん、じゃあ行ってくるね！！」

佐天「行ってらっしゃい！！」

友人の暖かい応援に後押しされ、

美琴は今日卒業式が行われている当麻の高校へと向かっていった。

ボタンを貰えば結婚できますか 4

卒業証書授与式が終わると、大抵は最後のホームルームが待っている。

1人の少年・上条当麻は教室内に違和感を感じていた。

土御門・青髪といった悪友や、姫神・吹寄といった友人と3年間同じクラスだったことではない。

3年間担任だったあの小さな先生が、生徒以上に泣いていることでもない。

この空気だ。

このようなイベント特有の湿っぽい感じでなければ感動の類いでもない。

こう、重いというか、ピリピリしているというか…そう、殺気に近いものを感じていた。

当麻（何でせうかこの空気？みんな変っていつかなんていつか…ときどき視線を感じるし…）

視線を向けているのは当然女子だ。

高校生活を通して当麻の競争率が高いのは理解していた。

だが、今まで様子を見ていた全員がこの日に勝負をかけようとしたため、

教室中、いや学校中が殺気立っていた。

小萌「じゃあ…グスツ…皆さん。これからも元気で頑張ってください
い…グスツ…」

「「「ありがとうございます！！！！」」」

そんなことを考えていたホームルームは、
小萌先生の涙を流しながらの最後の挨拶で締めくくられた。

と、同時に少女たちが一斉に動き出す。

「上条君、一緒に写真撮ってくれない？」

「良かったらメールアドレス教えてくれない？」

「この後打ち上げやるんだけど、来てくれない？」

「別に欲しくないけど、どうしても言うならボタン貰ってあげ
るわよ…」

………

当麻の周りには10人以上の生徒が集まり、当麻との仲を近づけよ
うとアピールをし合っている。

当麻は戸惑っている様にも見えるが、やはり男。
嫌がっている様子ではなかった。

土御門「もう我慢できないにゃー！！！！」

それを静観するはずもなく、土御門が爆発した。

青ピ「ボクも同感や。ここで見過ごしたら自分が自分でなくなる気がするんや!!」

2人の言葉に男子生徒全員がうなずき合う。

青ピ「と、いうわけでかみゃん」

土御門「男だけの卒業パーティーの開催ぜよ!」

言い終わるが早いか、土御門・青髪を先頭に当麻に突っ込む。

当麻「ちよつと落ち着いて話を…平和的に…不幸だー!!」

説得を1秒で諦め暴徒と化した男と、それに抗議する女の声を背に教室を飛び出していった。

…

当麻「いつたいなんだよ!卒業式の日くらい感傷に浸るとか、そういうことができないのかよ!」

当麻は学校を飛び出し、あの自動販売機のある公園まで逃げてきた。

そこで先ほどの悪友の行動に悪態をついていた

当麻「でも卒業か…これからあいつらとバカ騒ぎすることもないんだろっな…」

ふと卒業後の生活を考えると、少しセンチな気分になってしまった。

当麻「これからどうするかな…」

現在、午後2時59分

高校最後の日にこのまま寮へ帰るのはあまりにも味気ない。かといって予定があるかといえば、それを作る前に学校を飛び出す羽目に合ったため何も無い。

当麻「はあ…不幸だ…」

ベンチに深く座り、空を仰ぎながらつぶやいた。

待つこと10分。当麻の携帯には土御門たちの呪詛じみたメールしか届かなかった。

当麻「こんなメールばかりかよ…俺って意外と友達少ないのか…」
テンション下がりっぱなしの少年はふと思った。

当麻「ここにいるとよくアイツに会うのに…なんでこんな日に限ってこないんだよ。」

いつも忙しいときに限ってやってくるあの超能力者を思い浮かべる。よくよく考えてみると彼女と一緒にいることが多かった気がした。

出会った頃は『勝負！勝負！』と言っていた少女と、こんなにも仲良くなるとは、正直思っていなかった。

誰かのことを考えてしまうと、それが1人であることを余計に認識させてしまい、

また気分が沈んでしまいそうな気がした当麻は、とりあえず1人で出来ることを考えることにした。

当麻「ここにいてもしょうがないし…ゲーセンでも行くか。」

仕方がないという様子で重い腰を上げる。丁度そのとき後ろから声を掛けられた。

「お久しぶりです。こんなところでどうしたんですか？」

そこには未来の花嫁、美琴の最大のライバル・五和が立っていた。

ボタンを貰えば結婚できますか 5

当麻「久しぶりだな、五和。今日はどうしたんだ？何かの仕事できたのか？」

五和「えっとですね…その、今日は仕事っていう訳ではないんです…」

いつもと違い、言葉に詰まりながら話す五和に、
普段ならば違和感を感じるだろうが、今の当麻は気がつかない。

当麻「でも良かった。今日の上条さんは1人ぼっちのウサギのごとく、
寂しすぎて死んでしまいそうなのですよ。」

五和（ええ！？それってもしかして私に会いたかったとか…）

五和が1人妄想の世界で悶えていたが、知り合いに会えたうれしさを
噛み締めていた当麻はまたもや気づかない。

五和「あの…良かったら、その…」

顔を赤らめ、もじもじしながら当麻を誘おうとしたその時、

美琴「と、当麻！奇遇ね。どうしたの、こんなところで？」

そこに息を切らした美琴の声が掛けられた。

当麻「奇遇ってお前、そんな息を切らしながら『奇遇ね』なんて言

「つても全然説得力ないぞ。」

「やれやれ、といった様子だがどこかうれしそうにも見える当麻を見て五和が焦る。」

五和「（これは勇気を出さなきゃですね!!）
上条さん！あの、これから食事に行きませんか？」

当麻「食事？うーん、行きたいけどまだちょっと早くないか？」

五和「はう！？これは…選択を誤りましたか？」

美琴「（これはチャンスかも…）ねえ、これから。」

美琴が当麻を誘おうとしたとき、

当麻「まだ早いから、とりあえずゲーセンでも行かないか？」

そう言った当麻の前には

五和「はい!!」

花の咲いたような笑顔の五和と、

美琴「そうね。」

対照的につかりした顔の美琴がそこにはいた。

- - -

当麻「疲れた〜」

ファミレスのテーブルに突っ伏した少年の口から出た言葉に、正面に座った2人の少女は少し罰の悪そうな顔をした。

当麻「2人ともどうしたんだよ？ゲーセンのときといい、ファミレス入ってからのといい、お前らって仲悪いのか？」

五和「そんなことないですよ！」

美琴「そんなわけないじゃない！」

当麻「本当か？だって…」

2人の返事に疑いを持ちつつ、ゲームセンターでの出来事を思い出した。

・
・
・

〜ゲームセンターにて〜

『ねえ、私とレーシングゲームで勝負しなさい！！』

『それよりこっちのクレーンゲームと一緒にやりませんか？』

『な、なら、一緒にプリクラ撮ってあげてもいいわよ／＼』

『いえ！私と撮りましょう！』

『五和さんゴメンね。当麻は私と、先に撮るから。』

『いいえ！上条さんは私と、その…撮りたそうにしていますから、私の方が先です！！』

『2人ともちよつと落ち着いてくれませんか…？』

『当麻！わ、私と撮りたいでしょ？』

『上条さん！えつと、私と撮りたいですよね？』

『ちよつと引つ張らないで…痛！！落ち着いて…ねえ…不幸だ！』

・
・
・

美琴「そ、そんなこともあつたわね…」

当麻「それだけじゃないだろ？」

五和「もしかして、ここに来たときのことですか…？」

・
・
・

くファミレス到着

『3名様ですね？では、こちらのお席へどうぞ。』

『ありがとうございます。』

『……………』

『……………』

『どうしたんだ2人とも？早く座れよ。』

『わ、分かってるわよー！！（当麻の隣に座りたいけど…）』

『は、はい。今座りますね。（御坂さんも上条さんのお隣を狙ってますね…）』

『まあいいけど…っと、悪い、ちょっとトイレ行ってくる。』

『…御坂さん、提案があるんですが。』

『奇遇ね。私も提案があるわ。』

『私たちは反対側に座ることにして、』

『どっちの隣に座るかは当麻に決めてもらいましょう。』

『あれ？お前らまだ座ってなかったのか？』

『上条さん！？早かったですね……………』

『もしかして俺の隣は嫌だったのか？
別に俺に気を使わないで座ればいいぞ。』

『ちよっと！押さないでよ！』

『私はそんなことないのに…』

・
・
・

当麻「俺としてはこれをきっかけに仲良くなって欲しいのですよ。」

そう言っつて自分の頼んだハンバーグを口に運ぶ

美琴「だから、別に仲が悪い訳じゃない…て、もういいか…」

美琴は半ば諦めた様子でパスタを食べる

五和「私は御坂さんのことを良く知れましたし、なんだか共感することが多かったので、
仲良くなれそうです。」

どこか棘のあるような言葉にも感じたが、何事もないようにピザを口にする。

当麻「ふーん…五和のピザうまそうだな。俺のハンバーグとちよつと交換しないか？」

五和「もちろん構いませんよ。…どうぞ。」

当麻は小皿に自分のハンバーグを取り、五和のピザ一切れと交換した。

それを見ていた美琴も動いた。

美琴「ね、ねえ。私にもハンバーグ分けてくれない？」

当麻「別にいいぞ…って、もう小皿がないじゃねーか。」

当麻はテーブルに小皿がないことに気がついた。

しかし、その言葉を待っていたように美琴が言葉を続けた。

美琴「別に大丈夫よ。ほ、ほら。口を開けなさいよ。」

美琴はフォークにパスタを巻きつけ、当麻の口の前へ持って行く。いわゆる『あーん』である。

当麻「えーと、美琴さん？さすがにこれは恥ずかしいのですが…」

当麻はやんわりと断ったが、美琴は

美琴「別にいいじゃない。それより、私のパスタが食べられないって言うの！？」

まるで夕子の悪い酔っ払いだ。

当麻「…わかったよ。」

その勢いに折れるような形で当麻は申し出を了承した。

五和「そ、それは行儀が悪いですよ!!」

少しの間フリーズしていた五和が抗議の声をあげたが

当麻「もぐもぐ…なかなかうまいな。」

少し遅かったようだ。

美琴「じゃあ、その、当麻のハンバーグを…」

当麻に食べさせてもらうことを要求した美琴に、さすがに五和も対抗する。

五和「もぐもぐ…はい!!このお皿空きましたから、これを使ってください!!」

当麻「ああ、あ、ありがとう…」

当麻も少し驚いたようだが、『行儀が悪いから』と念を押されて納得した。

このやり取りで、『余計なことを』と思った少女と、

『気が抜けませんね』と思った少女がいたことは言うまでもない。

ボタンを貰えば結婚できますか 6

その後は大したアクシデントもなく、しばらくの間、3人は話しに花を咲かせていた。

そんな時間が1時間ほど続いたとき、当麻が携帯電話を取り出して時間を確認した。

当麻「もう8時過ぎか…そろそろ帰るか。」

その提案に、美琴・五和の2人も頷き合った。

美琴「じゃあ、ここは私が払うわ。」

そう言っつて美琴は伝票を持って支払いに向かおうとした。

当麻「おいおい、女の子に奢ってもらうほど上条さんは甲斐性無しじゃないんですが…」

当麻は美琴の手を掴むと、当然のように自分も支払うと言い出した。

五和「今日は上条さんの卒業祝いなんですから、ここは私たちに花を持たせてください。」

当麻「そういえばそうだったな…じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうわ。」

五和の言葉に納得した当麻は少し嬉しそうに申し出を受け入れた。

その時、五和は自然な形で美琴から当麻の手を離し、自らの手で握り直すというテクニクを見せたことを美琴は見逃さなかった。

美琴「じゃあ、払ってくるから外で待つてよ。」

美琴と五和はレジへ、当麻は出口へと向かっていった。

- - -

当麻「いやー、なんだかんだで今日は楽しかったな。2人ともありがとな。」

当麻が無意識に笑顔を浮かべながら感謝を述べたため、2人の頬は赤く染まっていた。

しかし、2人は嬉しさを感じつつも、内心不安も感じていた。

美琴（このままいけば五和さんに告白されることはないと思うけど…それじゃあ何も変わらないわよね…）

五和（今日告白しようとしてきたんですけど…御坂さんがいますし、日を改めた方がいいかもしれませんね…）

プルルルル…

携帯電話の着信音で2人の意識は現実に戻された。

美琴「あ、私の携帯だ。…ちょっとゴメンね。」

そう言うと美琴は2人から少し離れた所へ移動し、背を向けたまま

通話ボタンを押した。

その様子を見ていた五和は決心した。

五和「上条さん！あ、あの、ちょっとこちらへ来てくれませんか？」

当麻「？ああ、別にいいぞ。」

そう言つて五和はファミレスの隣ある駐車場へと当麻を連れて移動した。

そこからは電話をしている美琴の姿は見え、ちょうど死角になっていた。

そのことを確認した五和が口を開いた。

五和「あのですね、その、ちょっとしたお願いがあるんです。」

当麻「お願い？一体なんだよ？」

五和「な、名前をですね…その、これから『当麻さん』と呼んでもいいでしょうか？」

当麻「なんだ、そんなことか。もちろんいいぞ。」

五和が恥ずかしさを必死で堪た申し出を、
当麻はあっさりと承諾した。

五和「あと、もう一ついいでしょうか？」

当麻「なんだよ、改まって。」

五和が緊張していることを察した当麻が微笑みかける。

その気遣いを五和も察し、ふー、っと大きく息を吐いた。

五和「上条さん、いえ当麻さん。私、ずっと前から言いたかったことがあるんです。

その、当麻さんのことがずっと前から……」

顔を朱に染めた少女が心に秘めた思いを今、告げようとしていた。

……

美琴「はい、どうしたの？」

美琴は電話の主に尋ねた。

『あ、初春です。今大丈夫ですか？』

電話は美琴の友人、初春からだった。

美琴「もちろん大丈夫よ。それでどうかしたの？」

初春『今白井さん達と卒業パーティーしているって言いましたよね？それで御坂さんが遅れてくるって言ったら白井さんが暴れてしまつて……』

美琴「黒子が？」

初春『はい。今も「お姉さまー！！お姉さまがいらしゃってくれま

せんと、

黒子は黒子は…あああー！！！」…聞こえましたか？」

美琴「…ええ、聞こえたわ。もうすぐ行くって伝えておいてもらえる？」

初春の呆れた声に、美琴も呆れた声で伝言を頼む。

初春『分かりました。じゃあ先ほど場所をメールで送っておきましたから、待ってますね。』

美琴「ええ。早く行くようにするから、悪いけど黒子のことよろしく頼むわね。」

電話を切って振り返ると当麻と五和の姿が見えないことに気がついた。

嫌な予感がする

そう思った美琴が辺りを見渡すと

「……………」

誰かの話す声がした。

美琴は声のした方へ走った。

声の主は違う人という可能性もあったが、美琴はそんなことは全く考えなかった。

ここは記憶にあった。

数年前、当麻の卒業式の日一日中彼を探し回って辿り着いた場所だ。

明るいうちは気が付かなかったが、暗くなったときのこの佇まいは人生で1番悲しいかったあの日の、まさにその場所だった。

迂闊だった。

少し目を離していた間に彼女が行動を起こすなんて…

そんなことを考えると目の前が暗くなりそうになる。

そんな考えを頭から振り払うように頭を振る。

そして、少しでも早く、後悔しない未来のために走り続けた。

ボタンを貰えば結婚できますか 7

五和「上条さん、いえ当麻さん。私、ずっと前から言いたかったことがあるんです。」

その、当麻さんのことがずっと前から……」

少女が胸に秘めた思いを告げようとした、まさにその時

美琴「ここにいたのね……！」

間一髪、美琴の声が五和の声を掻き消した。

当麻「ああ、悪い。ちょっと五和が話があるって言ったんで移動したんだ。」

五和「はい、私がちょっと話があったので、その、すいませんでした。」

当麻は素直に謝罪したが、五和はかなりがっかりした様子で謝罪した。

美琴は2人の様子を見て自身が間に合ったということを感じ取るこ
とができた。

美琴「な、なら別に構わないわよ。」

安心した美琴は息を整えつつ、言葉を続けた。

美琴「ねえ、今からだけど、良かったら黒子たちの卒業パーティー

に來ない？」

美琴は突然2人を今日卒業を迎えた後輩のパーティーに誘った。

当麻「白井の？俺が行ったらアイツ、キレちまうんじゃないか？」

白井が自分のことを嫌っているかと思っている当麻は当然のように渋った。

美琴「別にいいじゃない。五和さんは行くでしょ？」

五和「私ですか！？行く行かないの前に、その方との面識がないんですが…」

やはり五和もいい返事をしない。

そんな話をしていると、

「おーい、五和ー！！こんなところで修羅場かー？」

どこか聞き覚えのある声が出た。

そして、こんな失礼なことをこんな軽いノリで言う人間など…

何人も心当たりがあったのか、当麻が複雑な顔を見せた。

当麻「建宮かよ！？お前がどうしてここにいるんだよ？」

声の主は天草式の魔術師・建宮斎字その人だった。

建宮「俺か？今日は五和の観察…じゃなくて、

急な仕事が入ったから五和を呼びに来たのよ。」

五和「仕事ですか？それならわざわざ来なくても、電話でいいんじゃないですか？」

当然の疑問が投げかけられる。

当麻「そうだよな。ここに入ってくるだけに一苦労だろ？」

建宮「だから今日は観察…じゃなくて、『たまたま』。

そう、『たまたま』近くにいたから少年に挨拶を兼ねてここに来たのよ。」

どう聞いても嘘だということは明白だが、そこを突っ込むと面倒だ、そう感じ取った美琴は黙って成り行きを見守っていた。

五和「…分かりました。そういう訳なので私帰りますね。」

当麻さん、御坂さん、今日は楽しかったです。どうもありがとうございました。」

五和は建宮の言葉を信じたのか、笑みを浮かべて丁寧に別れの挨拶をしてくれた。

当麻「おお、また会おうな。それから建宮、ほどほどにしないと神裂に怒られるぞ。」

建宮「何のことが分かんねーのよ。っと、言い忘れたけど、少年。卒業おめでとう。」

当麻の警告もどこ吹く風といった様子で聞き流した建宮と、

名残惜しそうな顔をした五和を当麻と美琴は見送った。

当麻「建宮のヤツ、絶対つけてたな。」

当麻は呆れたようにも、嬉しそうにも見える顔でそう言った。

美琴「でも、面白そうな人だったじゃない。

で、パーティーに来るの？来ないの？」

正直なところ美琴にとってはパーティーに当麻が参加することなど、どうでも良かった。

ただ、当麻と少しでも長く一緒にいられるという口実が欲しかっただけだった。

一緒にいれば後はタイミングだけだ。それさえあれば未来を変えられるはず。

パーティーに来なくても当麻のことだ。

きっと自分を送ってくれるくらいのこととは言ってくれるだろう。

どちらでもやりようがあると期待していたが、

聞こえた答えは予想の斜め上に行くものだった。

建宮「ぜひ参加したいのよな。」

当麻「うお！？建宮、お前、さっき帰ったんじゃないのか？」

ついさっき見送ったはずの建宮が、いきなり返事をしたので

当麻と美琴は驚きの声を上げることになった。

建宮「悪い悪い、女性教皇からの卒業祝いを忘れてたのよ。」

悪びれる様子もなく、ポケットから綺麗に包装された箱を取り出し、当麻に手渡した。

当麻「とりあえずサンキューな。ここで開けてもいいか？」

当麻は建宮から許可をもらい、箱を開ける。

当麻「腕時計じゃなーか。しかも結構高そうな。」

箱の中には銀色の腕時計が鎮座していた。

腕時計は普段身に着けないが、一目見ただけでいいものだということが分かる一品だった。

美琴「高そうじゃなくて、これ高いわよ。」

美琴もこの手のものには明るくはないが、それでも教育の賜物で目利きはかなりのものだ。

当麻「これ着けるのってかなりプレッシャーだよな…」

建宮、神裂に『ありがとう、大事にする』って伝えておいてくれよ。」

建宮「任せておくのよ、少年。…っと、ついでに一枚どうだ？」

そう言った建宮の手には、どこから取り出したのか分からないような、

立派な一眼レフカメラが収められていた。

当麻「そつだな。せつかくだから頼むわ。」

当麻は快諾したが、美琴はいい顔をしない。

それもそつだ。写真を撮られてしまったては元の時間に戻ってしまう。

建宮「五和もそちらのお嬢さんも早く少年の隣に並ぶのよ。」

美琴「え！？ちょっと待って！」

美琴がうるたえている間に

パシャ！！

シャッター音と共に目の前が真っ暗になった。

- - -

目を開くとやはり結婚式場の招待客としてそこにいた。

妖精「お前は何度同じ失敗をすれば気が済むんだ？」

自分を過去へ送ってくれる妖精らしからぬ風貌の妖精の声でした。

妖精「何でタイミングやきっかけに頼ろうとするんだ？」

二人きりになったら気持ちを伝えよう…

一緒にパーティーに行ったら伝えよう…

ムードを作ってから伝えよう…

そんな小さなことにこだわっているから、大きな幸せがつかめないんだ。」

美琴「ううー!!」

痛いところを突かれて言葉が出ない。

美琴「今回は運が悪かったのよ!あのバカ魔術師が邪魔しなきゃうまくいったわよー!!」

ひどい言いようだ。

妖精「まったく…いい加減、彼の気持ちを変えるのは諦めて、自分の気持ちを変えてみたらどうだ?」

美琴「自分の?」

妖精の突然の提案に美琴は首を傾げるしかない。

妖精「君が、あの席に座る未来よりも、この披露宴に出席しない未来を作る方が、よっぽど簡単だという事だ。」

美琴「どういふことよ…」

美琴の目が据わっている。

妖精「本来人間には、忘れるという便利な機能が付いている。過去の君が、彼の事を忘れる事ができれば、今みたいな辛い思いをせずに済むとは思わないか?」

美琴「忘れるなんて…そんなこと無理よ。」

妖精「本当か？人間は酒を飲んだり、旅に出たり、新しい恋をする。そうやって過去の出来事に区切りをつけるだろ？」

美琴「それでも、どんなに時間がたって、どんなに恋をしようとしても…

きつと、当麻を忘れるなんて絶対できない…
当麻を越える人なんて絶対に出会えない…」

妖精は美琴の言葉を促すかのように黙ったままだった。

美琴「それに言ったでしょ？」

アイツの言葉が私の世界を変えてくれた…

アイツの手が私を世界を救ってくれた…

アイツだけが私の心を満たしてくれるの。」

美琴の本音だ。

彼女の中で上条当麻という存在はそれほど大きい。

14歳という若さで出会った少年が自分の人生を変えてしまうほどに…

妖精「無理に忘れようと思っても無駄なのか…

すぐに忘れられないから好きだということか。」

美琴の真っ直ぐな思いは妖精も驚くほど強く、

そして純粹なものであるということを改めて実感させられた。

妖精「君の気持ちはよく分かった。その思いの強さは感嘆に値する。ならばこそ、最後のチャンスが無駄にするなよ。」

美琴「ええ！？最後ってどういことよ！？」

そんな言葉を聞き流した妖精は手を掲げ、指を鳴らす。

パチツ！！

世界に再び光が戻った。

ボタンを貰えば結婚できますか 7 (後書き)

やっぱりハッピーエンドの方が良いでしょうか？

アドバイスなどあったらお願いします。

思いを告げれば結婚できますか 1

人間とは、物事が上手くいかなかった時に、理由を求める生き物である。

状況やタイミング、天気や運勢、様々な言い訳を引っ張り出しては自分を慰める。

こんなはずではなかった…、もう1度やり直せばと。

やり直せば本当に上手くいくのだろうか？

一度目で出来なかったことが、二度目で出来る自信は、いったいどこから来るのだろうか？

女の名前は御坂美琴。

今、この女の本当の実力が試されている。

初恋故の淡い関係を卒業し、正面から彼と向き合う事が出来なければ、

未来を変える事など到底叶わない。

果たして、この女に幸せは訪れるのであろうか。

- - -

司会「では次のスライドへ参りましょう。」

五和が当麻に告白できなかった。

しかし、そのことで結婚式がなくなった訳ではなかった。

つまり、二人が恋仲になることが先に伸びただけである。

そして、スクリーンに映し出された写真がそのことを物語っていた。

司会「バレンタインデーといえば女性が男性に気持ちを伝える日。
新郎はこの日に、チョコレートと生涯の伴侶を手にしました。」

写真の五和は、そつと寄り添うように、
そこが自分の居場所であることを噛み締めるように、
柔らかな笑顔を浮かべ当麻の隣に座っていた。

おそらく場所はカフェだろうか。

2人の前のテーブルには2人と同じように、寄り添うように置かれたティーカップと、
五和からのバレンタインのプレゼントだろうか。
綺麗に包装された箱が置かれている。

初春「そういえば、白井さんってバレンタインデーを真面目にしたことってあるんですか？」

黒子「もちろんです。毎年、ベルギーから最高級のチョコレートを取り寄せて、
私の愛をこれでもか、というくらい詰め込んだ手作りチョコレートをお贈りしていますの。」

佐天「それって御坂さんですよね？」

黒子「当然ですわ！！お姉さま以外は眼中にありませんの。」

初春「さすが白井さんですね…」

こんな他愛のない会話を聞くだけで、今の美琴は胸を締め付けられるような感覚に襲われる。

こんな風に、黒子のように自分の気持ちを素直に口に出せたら、と。

黒子と同じくらい…では完全にアウトだが、その十分の一くらいには素直になれたら…

きつと、自分の気持ちを伝えられたらう。

きつと、自分が当麻の隣に座っていただろう。

きつと、結婚式で後悔など微塵も感じないだろう。

また強く思った。

『あの頃に戻りたい』と…

バンツ！！！！

辺りが再び暗くなる。

「バレンタインデーか。新郎に告白するには最高の舞台だな。」

声の主はこの教会に住んでいるという自称・妖精だ。

妖精「小説家・二葉亭四迷が『I love you』という言葉

に初めてぶつかったとき、
どう訳すか悩んだらしい。
今みたいに『好き』とか『愛している』とか使わない時代だからな。
それで、何と訳したか知っているか？ 『私は死んでもいい』・・・
と。」

美琴は何も言わずに、妖精の言葉に耳を傾ける。

妖精「つまり思いを告げる、ただそれだけのことが命を懸けるに値
する。」

これは私と彼の共通見解だ。」

なんて図々しいヤツだ。正直、美琴はそう思っていた。

美琴「それはそうかもしれないけど、分からない事があるの。
過去に戻るって写真の撮られたときに戻るんでしょ？

私、この写真には写ってないんだけど・・・」

スクリーンに映し出された写真を見る。

そこには美琴の姿はどこにもない、つまり戻ることができないとい
うことだ。

妖精「よく見てみる。左端の方に写っているぞ。」

言われた所を見てみると、確かに写っているようにも見える。

美琴「これが私なの？」

妖精「そうだ。そして、この写真が君の写っている最後の写真だ。」

美琴「ということは、この写真が…」

妖精「本当に最後のチャンス、ということだな。」

美琴の顔が引き締まる。

このチャンスを逃したら『今』は変えられない。

当麻の隣に立つことも、

当麻の笑顔を受け取ることも、

当麻と一緒に歩むことも、

その全てが叶わなくなる。

嫌だ。そんなこと嫌だ。

美琴の顔には、戦地に赴く兵士のそれと同じような佇まいが滲んでいる。

妖精「奇跡の扉を開ける鍵は誰の手にも握られている。

ただ、それに気付く人はほんのわずかしかない。

運命を変えるほどの大きな奇跡は、そうそう訪れない。

だが、『変えたい!』と思う小さな一歩を重ねることで、

いつの日か奇跡の扉は開く。

君にチャンスを与えたことを私に後悔させないでくれ。」

美琴「分かってるわ!私は…当麻の隣にいるために、必ず奇跡を起こすわ!」

美琴は自身を奮い立たせるように、決意を顕にした。

妖精「その意気だ。では行くぞ。『求めよ、さらば与えられん!』」

美琴「ハレルヤ〜!、チャンス!〜!」

美琴「きゃあああああああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜」

奇跡の扉を開くため、美琴の最後の挑戦が始まる。

思いを告げれば結婚できますか 2 (前書き)

あまり進みませんでした。

思いを告げれば結婚できますか 2

気が付くと、どこからか声がする。

「お・ね・え・さ・まー！ー！！」

ドスツ！ー！！

美琴「うっつ！ー！！」

なんだ！？

いったい何が起こった分からないが、自分はベッドに寝ていて、腹部に激しい痛みと重さを感じる。

周りを見渡すと、薄暗いながらも高校時代の寮の自室であることは分かった。

ということは、この自分の上に乗っているのは、

美琴「黒子！！アンタいったい何してんのよ！！！！」

美琴の体から稲妻が迸り、

黒子「ああああ！！お姉さまの愛の鞭…イイで、す…わ……」

能力を使い、黒子を沈黙させた。

-
-
-

美琴は常盤台中学を卒業した後、『少しでも当麻の近くにいたい』
という一心で、

当麻の高校の近くにある学校への進学を決めた。

無論、レベル5である自分が進学するにあたり、

高い能力開発水準を持つ学校からの誘いが多々あった。

霧ヶ丘女学院や長点上機学園、名前を挙げればきりが無い。

そんな状況で、大してレベルの高くない学校に進学した美琴は、
周囲から心無いことも言われた。

そんな状況でも『当麻と会える』ということを支えに、
努力を惜しまずにいた結果、僅か一年ほどで美琴の高校は
中学生達の憧れる高校の一つになっていた。

- - -

自分のベッドの上で伸びている黒子を見る。

高校に入って学舎の園を出て同室ではなくなったことで、
こうして毎日のように部屋に侵入してくるようになった。

本人はモーニングコール代わりなどと言っているが。

拳句の果てに、黒子自身も美琴の後を追って同じ高校に進学してき
た。

黒子自身も多くの学校から誘われたらしい。

それらすべてを蹴って自分を追ってきた後輩を、
少し可愛らしいと思った過去の自分を説教してやりたいと思っ
てしまふ。

黒子「ああ…おねえ…さま…」

体が麻痺しているため、ときどき痙攣しているのに、
恍惚の表情を浮かべている黒子を見るとつくづくそう思ふ。

それでも黒子のことは、なんだかんだで信頼している。
本人に言つと絶対に調子に乗るので、絶対に口にしない。

美琴「まったく…今何時よ…て、まだ6時前じゃない！」

ベッドの横に置かれた目覚まし時計の時間を確認する。

時計の短針は5と6の間を指していた。

美琴の部屋の東側には窓が設けられている。
そこに掛けられた淡いピンク色のカーテンの隙間から、
白んだ空が見える。

日の出までもうしばらくあるだろうか。

そして、美琴は考える。

スライドで見た写真の空は、暗くはあったが、まだ夕日の名残の紅
が残っていた。

この時期は、午後5時を過ぎれば辺りが暗くなり始める。

そう考えると、この写真が撮られたのは午後6時ぐらいだろうか。

つまり、美琴に与えられた時間は12時間ほど、という訳だ。

その間に、当麻に自分の思いを伝えなければ。

自分に残された時間をこうして実感すると、鼓動が早くなるのを感じる。

緊張しているのか、それとも不安を感じているのか。

今だモヤモヤしている自分に苦笑する。

美琴はそんな自分を落ち着けるために大きく息を吸う。

朝独特の澄んだ、そして冷涼な空気で体が満たされていく。それを何度もくり返して心を静める。

もう大丈夫だ。

すっきりさせた頭で再び考える。

そして、答えにたどり着くのに時間はかからなかった。

美琴「今日はバレンタインデー、ならやることは1つね！」

早朝、寮の一室に、力強い声が響く。

美琴「まず、私の気持ちを込めた最高の手作りチョコで、気づかせる。そして告白してこ、ここ、恋人同士に……」

尻すぼみに声は小さくなり、それに反比例して朝焼けに負けないほ

ど顔に赤みが増す。

しかし、その目には強い意志がありありと見て取れる。

美琴「そうと決まれば、さっそく材料を買わないと。」

そう言うと、中学時代に比べればかなり大人っぽくなったパジャマを脱ぎ、

クローゼットから取り出したジーンズと、オレンジ色のシャツを身に着ける。

鏡の前で簡単に身支度を整え、白いダッフルコートを羽織る。

まだ、少し寒さを感じ、赤いマフラーを巻くことにした。

美琴「よし！じゃあ最高のチョコを作るわよ！！」

美琴は材料を買うために、元気よく部屋を後にした。

ここから御坂美琴の運命を決める12時間が始まる。

思いを告げれば結婚できますか 3

日の出を迎えたばかりの朝の町を、1人の少女が歩いている。

時間が時間だけに、比較的大きな部類に入るこの通りでも少女以外の人影はない。

この何気ない、一見するとありふれた様に、少女は自分が異物であるかのような感覚を覚える。

本来、自分にはここにいない。厳密には『過去』の自分だが。

どんな魔法を使ったのか。確かに御坂美琴はここに在る。それがどんなに異常なことなのか。

はあー

そんな哲学じみた考えが浮かぶ自分にため息が漏れる。

このため息は、何も思考だけのものではなかった。

美琴「やっぱり、この時間じゃあお店なんてやってないわよね……」

はあー

ため息が漏れる。

早朝7時前、この時間は開いている店を探すほうが難しい。

一応、コンビニや24時間営業の食料品店にも足を伸ばしたが、美琴の目になうような素材を扱ってはいなかった。

理想を言うと、自身が鼻屑にしている洋菓子店。
あの店で扱っているチョコレートを使って当麻へのチョコを誂えた
い。

そう考えると、自分に残された時間が気がかりだ。

あの店の開店はたしか10時だった。

しかし、店主の気まぐれなのか、

それともただ単に時間にルーズなのか知らないが、
時間通りに開いているのを見たことがない。

既に5年は通っているのにだ。

単純に考えると、10時に材料を入手して、期限の18時までは8
時間ある。

しかし、その間にチョコを作り、当麻とのアポイントメントを取り
つけ、

身だしなみを整える時間が欲しい。

そう考えるとチョコ作りに掛けられる時間は6時間あるかないか、
といったところか。

材料入手の如何によってはさらに短くなる。

美琴は不意に不安になる。

仮に短く見積もり5時間しか時間がなかったとして、
チョコの1つや2つ、作るには問題ないだろう。

しかし、美琴には前科があった。

それは以前、黒子の誕生日に彼女に内緒でお祝いをしよう、という計画が持ち上がったときのことだ。

美琴と佐天、そして初春の3人が集まり、美琴の借りたキッチンでケーキを作ろうとしていたとき。

佐天「ケーキだけじゃ寂しいので、クッキーでも作りますか！」

そんな佐天の提案を任されたのは美琴だった。

当初の予定では、一時間ほどでクッキーは完成し、その後ケーキのデコレーションなどを手伝う予定だったのが…

美琴はクッキーを2時間かけて作った。予定の倍だ。

しかも、自分が手伝うどころか、逆に助けられてしまった。

彼女はお菓子作りというものが得意ではなかった。

無論、経験がない訳でも、砂糖と塩を間違えるようなお約束をする訳でも、

勝手に手を加えてめちゃくちゃなモノを作る訳でもない。

手順を守れば誰でも出来る。それがお菓子作りだ。

彼女はむしろ、その手順通りにきっちりすることが苦手だった。

材料をグラム単位で正確に計ったり、小麦粉を篩いにかけてたり、

加熱する温度を正確に測ったり。

そんな細々した作業が彼女の性に合わなかった。

その上、自分の作ったものに妥協できない性格も加わり、納得できないからやり直す悪循環。

美琴「不本意だけど、この際材料には妥協しようかしら……」

そう言つて右手に持った買い物袋に目を落とす。

そこには先ほど保険として購入したチョコレートがある。

悪くはないが、それでも彼女の理想には遠く及ばない物だ。

はあー

また、ため息が漏れる。

ふと、その白い息の向こうの看板に目を引かれた。

『バレンタインデーにはベルギーチョコで彼の心をゲットしよう!』

それはそんな安っぽい文句が書かれた販促用の立て看板だった。

だが、それを見た美琴ははっとして、

美琴「黒子よ!黒子が毎年くれるヤツを分けてもらえば良いじゃない!」

そう興奮気味に言った。

誰かが『ため息をすると幸福が逃げていく』と言った。

この時ばかりはため息も悪いものじゃない、少女はそう思った。

美琴「そうと決まれば、早く帰って黒子に頼まないよ。」

少女は孤独を感じていた道を、息を切らせながら寮へと走っていった。

思いを告げれば結婚できますか 4 (前書き)

ちよつと変化もです。

思いを告げれば結婚できますか 4

部屋に戻ったのは7時を回ったころだった。

未だにベッドの上で寝ている黒子を見て1つの問題に気が付いた。

美琴「チョコが欲しい、なんて言ったら黒子が黙ってないわよね……」

そうだ。

そんなことを言ったら、黒子は絶対に邪魔をするだろう。

それでは貴重な時間が浪費されてしまう。

美琴は考える。

どうすれば黒子に怪しまれずにチョコを作れるのか。

少しの思案で、1人では難しいのでは、という結論が浮かんだ。

黒子を誤魔化すことも、時間内にチョコを作り上げることにも。

美琴「……佐天さんに頼もつかしら……」

1人の少女の顔が浮かぶ。

自分の恋心を唯一知っている、親友の顔が。

美琴はこんな時間では迷惑かと思ったが、
背に腹は変えられぬと、携帯電話を手にした。

プルルルル…プルルルル…

『はい、どうしたんですか？』

数回のコールの後に、受話器の向こうから、少し眠たそうな少女の
声が聞こえてくる。

美琴「こんな時間にゴメンね。ちょっと頼みたいことがあるんだ
けど。」

黒子に気づかれぬように、少しトーンを落とした声で話しかける。

佐天『いえいえ、気にしないでくださいよ。それで、頼み事ってな
んですか？』

美琴「その…チョコレートを作りたいんだけど…」

佐天『チョコですか？…あ、もしかして上条さんにはですか？』

美琴「うん…」

顔を真っ赤にしながら頷く。すると、

佐天『任せてください！この佐天涙子、及ばずながら手伝わせてい
ただきます！』

聞こえてきたのはやけにテンションの高い声だった。

美琴「あ、ありがとう。」

佐天『あ、でも白井さんは大丈夫ですか？』

佐天が一番の問題を指摘する。

美琴「そうなのよ。黒子にバレないようにしないといけないのよね……」

佐天『もしばれたら…上条さんの命の危機ですもんね。』

受話器の向こうの声は、冗談めいた声だったが、全く笑えない。黒子ならやりかねない。いや、絶対にすると言い切れる。

佐天『ああ、白井さんで思い出したんですけど、この間の初春の誕生日。』

白井さんのプレゼント何だと思えます？紐パンですよ！？黒の！リースの！！ステスケの！！！！

いやー、もしあれを初春が履いたって考えると、迂闊に確認も出来ませんよね。』

美琴「それは驚くわね…もし私がもらったら心臓が止まっちゃうかも。」

突然の話題に驚く。

なんてモノを渡して渡しているんだ、この後輩バカは。

佐天『御坂さんならお仕置きが先じゃないですか？』

御坂「そ、そんなことないわよ！」

否定はするが、どこか納得している自分がいることに恥ずかしくな

る。

美琴「と、とにかく！黒子には内緒にしていってことで、場所は準備が出来たらすぐに連絡するから、よろしくね！」

気恥ずかしさからだろうか。

小声で話すことも忘れ、美琴は一息で言い切った。

佐天「分かりました！じゃあ、私も準備しておきますね！！」

電話を切り、ふーっと、大きく息を吐く。

佐天に協力を取りつけた。これで何とかなるだろうか。

もし黒子が疑ってきてても、佐天さんが口裏を合わせてくれるだろうし、

友達同士が集まって、友チョコを作ることぐらい普通だろう。

もし、私が誰か男にチョコを作ると疑っても、

私のことをよく知っている黒子のことだ。

私が誰かに協力を頼むことはないと思うだろうし、

何より自分の恋愛のことを誰かに話すなど、

地球が逆回転を始めるくらいありえないと思っているに違いない。

実際、私自身が打ち明けることなどありえないと思っていたのだから。

ふーっと、再び大きく息を吐き、ベッドに横たわる黒子に声を掛ける。

そう思っていたところに、

美琴『……黒子にバレないように……いけない……』

自分には秘密にと、確かにそう聞こえた。

少しショックを受けたが、黒子には1つのストーリーが浮かんだ。

黒子（今日はバレンタインデー……もしや、お姉さま……！）

あの野蛮で、下品で、甲斐性の欠片もない、腐れ類人猿にチョコを
！？）

一方で、嫌な考えを振り払おうと努める。

黒子（し、しかし、お姉さまが誰かに相談するなどありえませんか！
ですが、もし、万が一、事実なら……ぶっ殺してやりますわ……！！）

だが、振り払うことは叶わず、黒子の体から殺気が迸る。

まさに、彼女の中で上条当麻の抹殺が決定事項になる寸前、声がし
た。

美琴『……驚くわ……私がもらったら心臓が止まっちゃう……』

今の言葉に、少女は矛盾を感じた。

黒子（お姉さまがもらったら驚く？）

殿方が女性からチョコを送られるのは普通のはずですから、
殿方目線で考えても驚くことはありえませんか……。もしや……！！）

だから黒子は決めた。

知らないフリをして、美琴の気持ちを受け取ることを。そして今夜は…考えただけでどうにかなりそうだ。

— — —

美琴「ねえ、黒子。ちょっといい?」

美琴は黒子の肩を揺すりながら声を掛ける。

黒子「う…ん、お姉さま、おはようございます。」

黒子は今起きたかのような芝居をする。

美琴「ちょっと頼みたいことがあるんだけど。」

どうやらバレなかったようだ。

彼女はそのままとぼける。

黒子「何ですか?私にできることなら何でもおっしゃってください。」

美琴「黒子、チョコ持ってたわよね?その、ちょっと分けてもらいたいんだけど…」

黒子(来ましたわ!!!)

心の中で会心のガッツポーズをするが、顔に出さないように努める。

美琴「少しでいいの。その、お願いできる？」

黒子「ええ、ええ、それはもちろん構いませんわ!!」

美琴「……へ!?!」

追求されると思っていた美琴は、二つ返事で了承した黒子に、肩透かしを食らい、間抜けな声を出してしまう。

黒子「ちょっとお待ちくださいな。すぐに取ってまいりますので。」

そう言うと、テレポートを使い、黒子の姿が一瞬で消える。

そして黒子は一分ほどで紙袋を持って現れた。

黒子「どうぞ、お姉さま。」

手渡した黒子の顔はこれ以上ないくらいの笑顔を浮かべていた。しかしなぜだろう。健全な笑顔ではない気がしてならない。

美琴「あ、ありがとう。それで、ちょっと用事があった、

たぶん帰るのは7時過ぎになると思うから。」

黒子「ええ、黒子のことはお気になさらず、ごゆっくりと。」

気持ち悪いくらいに素直な黒子に不安を感じつつも、
気にするほどの余裕もない美琴は、それを放置して部屋を後にする。

黒子「グフフフ…お姉さま、黒子はお姉さまのご期待に必ず応えま

すわ……」

邪な感情を顕にした後輩^{ヘンタイ}を残して。

思いを告げれば結婚できますか 5

佐天「さて、ただいまから『第一回・チキチキ、バレンタインチョコ選手権』を開催しまーす!!!」

いえーい、と1人盛り上がる佐天に冷ややかな視線が浴びせられる。

そして沈黙。

それに耐えられなくなった佐天が口を開く。

佐天「ちょ、ちょっとは突っ込んでくださいよ！恥ずかしいじゃないですか…」

どうやら、彼女なりに盛り上げてくれていたようだ。

美琴「気を使ってくれてありがとう。でも、気にしなくて良いから準備しましょう。」

佐天「そうですね。じゃあ、さっそくやりますか!」

2人は用意した材料をテーブルの上に並べていく。

チョコに、生クリーム、卵に砂糖。ナッツ類もあり、

美琴が借りたレンタルキッチンが、甘いにおいで満たされていく。

佐天「それで、どんなチョコを作りますか？生チョコとかトリュフとかブラウニーですか？

それとも、思い切ってケーキとか作っちゃいますか？」

そう言われると、チョコを渡すことで頭がいつぱいだった美琴は、何を作るのかということを中心に失念していた。

美琴「そうね…何が良いんだろうね？」

佐天「決めてなかったんですか!？」

2人して悩んでしまう。

佐天がいろいろとアイディアを出すが、どれも魅力的に感じ、なかなか1つに絞れない。

佐天「じゃあ2つ作って、うまく出来た方をプレゼントにしましょう。」

決められないのなら、完成品の出来で決める。なるほど、それならば間違いはあるまい。

美琴「そうね、その方が悩まなくて良いかも。」

提案を承諾し、レシピを選ぶ。

美琴「じゃあブラウニーとチョコケーキにするわ。」

佐天「決まりですね。じゃあ、頑張って作りましょー!！」

- - -

2人の作業は対照的だった。

佐天「まずは材料の計量ですね。」

佐天は秤を使って、手早く重さを計っていく。

対する美琴は、うまく計れずにいる。

美琴「47グラム…、43グラム…、48グラム…」

バターを45グラム計るのだが、足しすぎたり減らしすぎたりと、目盛りの上を行ったり来たりするばかりで、イライラが募る。

美琴「ちよっとくらい多くても良いわよね。」

少し投げやりになった美琴は、

佐天「ダメですよ、御坂さん。ちゃんと計らないと。」

注意されてしまった。

美琴「でも1、2グラムくらい多くても味は変わらないわよ。」

佐天「そうかもしれませんけど、込められる愛情はだいぶ違つと思
いますよ。」

やっぱり手間を懸けた方が、食べてもらったときの嬉しさも、
伝わる思いも、その分大きくなりますからね。」

言われてはつとした。

大事な人に渡すものなのに手を抜くなんて、そんなことは絶対にし

てはいけない。

そんなことも忘れていたなんて、考え直さなくちゃいけない!

美琴「そうよね。ちゃんとやらないと失礼よね。」

苦手ながらに、少女は時間をかけつつも、材料を計っていく。

佐天「じゃあ次は、チョコを湯せんしましょうか。」

計ったチョコを細かく刻んでいく。

気持ちを込めるように、丁寧に作業する。

そこからの作業は順調に進んでいき、

そして12時を少し過ぎたところで、まず1つ目のブラウニーが完成した。

佐天「じゃあ、お昼休憩にしますか。」

美琴「そうね、さすがにお腹空いちゃったしね。」

チョコ作りの途中に作ったサンドイッチとお茶を準備して一息つく。

佐天「ところで、御坂さんって上条さんのどこが好きなんですか?」

突然のことに、口からお茶を吹き出しそうになる。

美琴「さ、佐天さん!?いきなり何聞くの!?!」

佐天「えー、だって気になるじゃないですか。」

お手伝いしたお駄賃ってことで、教えてくださいよ。」

そう言われると、言わない訳にはいかない気がする。

でも、と思う。

考えてみると、なぜ当麻のことが好きになったんだろう。

私を助けてくれたから？

私の世界を変えてくれたから？

それはそうなのだが、少し違う気がした。

美琴「そうね…強いて言うなら一目ぼれ、かな。」

それ以外に答えはないだろう。

それは彼が上条当麻であったから、私が御坂美琴であったから。そう答える以外には、何とも言いようがないように思う。

佐天「なんだか素敵ですね！」

彼女は目を輝かせてそう言った。

佐天「私思うんですよ。話したり、遊んだりしているうちに、その人のことが好きになっちゃうってありますよね。でも、それってちょっと違うんだって。

最初の一目で恋を感じなかったら、それって恋じゃないって。一目ぼれだけが本当の恋になるんだって、そう思うんです。」

そう言つと、恥ずかしそうに頬を掻く。

佐天「恥ずかしい事言っちゃいましたね。…さあ、続きやりましよう！」

残っていたサンドイッチを口に放り込むと、さっさと調理台へ向かつてしまった。

――

「完成〜！！」

キッチンに声が響いたのは15時の10分ほど前だった。

佐天「じゃあ、味見しましょうか。」

最初に作ったブラウニーとチョコレートケーキを食べ比べる。

佐天「う〜ん！どっちも中々の出来ですね。」

そうだ。どちらもうまく出来たがその分、甲乙付け難い。

佐天「上条さんの好みはどっちですか？」

やっぱり男の人は少しビターな方がいいんでしょうかね？」

当麻の好み。美琴は何年か前の事を思い出した。

美琴「そういえば、前にお見舞いでケーキを持っていったんだけど、確かその時、1番最初にチョコレートケーキを食べてたのよね。」

最初に取ったからといっても、それが1番好きとは限らない。人によつては最後まで取っておくものだから。

でも、彼は絶対に最初取る。

残そうものなら、あのシスターに持っていかれるからだ。

佐天「じゃあケーキの方にしましょうよ。残った方は初春と白井さんの分にして。」

当麻へのプレゼントが決まり、佐天がラッピングをすると申し出た。

そこで美琴は当麻を誘うメールを打つ。

- - -

To: 上条当麻

突然だけど、今日何か用事がある？

もし、渡したいものがあるから時間があつたら、

17時30分にいつもの公園に来てくれる？

返事待ってます。

From: 美琴

- - -

メールを送つてから15分ほどして、当麻から返信が来た。内容は簡素なもので、『分かった』とだけ書いてあつた。

佐天「こっちは準備できましたよ。」

台の上には可愛らしくラッピングされた箱が置かれている。

美琴「ありがとう、佐天さん。」

彼女には世話になりっぱなしだな。

それでも、見返りを求めない彼女には頭が下がる。

佐天「じゃあ最後は勝負服を決めましょう!」

…嫌な予感がした。

- - -

それから1時間半ほど、着せ替え人形のごとく、
いろいろな服を着せられた。

美琴も何着か用意していたが、それ以上にかなりの量を佐天は用意
していた。

その量、スーツケース4つ分。

一体どこから集めたのだろうか。

だが、その甲斐あってなかなかうまくいったと思う。

白と黒のボーダーニットのワンピースに黒のレギンス。

クリーム色のブーツに、白いニット帽を被って、ブラウンのダウン
コートを羽織る。

アクセントを付けるためにアイボリーのストールを巻く。

普段はあまりしないような格好だが似合っていると、自画自賛してみよう。

美琴「どう思う？」

佐天「よく似合ってますよ！これなら上条さんもちこころですよ。」

彼女はお世辞ではなくそう言ってくれるので、自身が湧く。

美琴「そろそろ時間ね。佐天さん、今日はありがとう。」

このお礼は必ずするわね。」

佐天「別にお礼なんていいですよ。あ、でもどうしてもって言うなら、

今日の結果とか、それからいろんなこと教えてくださいな。」

そう言って彼女は悪戯っぽくウインクをした。

彼女は私がうまくいくと信じて疑わない。

それは何よりの応援だ。

美琴「じゃあ行ってくるわね。」

美琴はケーキの入った紙袋を手に、部屋を出る。

最後の告白たたかいに向かうために。

思いを告げれば結婚できますか 5 (後書き)

次で最終回(仮)です。

思いを告げれば結婚できますか 6

夕日に染められた学園都市の街並み。

その中を縫うように、美琴は待ち合わせ場所へ向かっていた。
その手には、自信作のチョコが入った紙袋がしっかりと握られている。

落ち着かない。時間にはまだ余裕があるにも拘らず、自然と早足になってしまう。

これが本当に、本当に最後のチャンスなのだと。
そう考えると、胃から何かが競り上がってくる。

落ち着かないのは恐いからだ。
彼女はそう気が付いた。

うまくいく。そうでなければいけない。

弱気な自分を必死になって鼓舞する。

そうしているうちに、待ち合わせの公園にたどり着いた。

-
-
-

公園に到着したのは、約束の10分前だった。

この時間には珍しく、公園には自分以外の人影が見当たらなかった。

夕日に染まる公園は、なんとも言えない幻想的な風景に見えた。

考えてみれば、この公園には当麻との思い出が詰まっている。

このベンチにも、あの自動販売機にも、そこかしこに散りばめられている。

そして、そのどれもが愛おしく感じる。

今日、また新たな、そして人生で最もかけがえのない思い出が加わる。

そう考えると、この待っている時間すら大切なもの的一部分と思える。

いつしか彼女の心は落ち着きを取り戻していた。

「おっす、待たせたな。美琴。」

声がした。

振り返られずとも分かる。

人生でただ一人、自分が愛した人の声だ。

美琴「私も今来たところよ。」

そう言っつて振り返る。

そこには彼が立っている。

目を見つめる。

胸が高鳴る。

それだけで幸せな感情が溢れ出す。

この感情を一時のものにしたくない。
自分だけのものになりたい。

だから言いたい。

どれだけこの時を待ちわびたのか。

どれだけあなたが好きなのか。

どれだけあなたを必要としているのか。

だから知って欲しい。

どれだけあなたに救われたのか。

どれだけあなたを求めているのか。

どれだけあなたを愛しているのか。

どんなに言葉を紡いでも足りないかもしれない。

だから最初に、たった一秒だけの言葉『好き』とだけ言おうと思った。

「――。」

声がした。

その一言で、頭が真っ白になった。

手から紙袋が滑り落ちる。

ガサツ、という紙袋が地面にぶつかる音が妙に大きく聞こえた。

信じられない。信じたくない。

でも事実だ。

受け入れられない。受け入れたくない。

だが声は続いた。

当麻「俺、五和と付き合うことにしたんだ。」

それは死刑宣告だった。

聞きたくない。黙って欲しい。

何かを言おうとするが、

美琴の口は言うことを聞いてくれない。

言葉が出ない。

喉元まで出かかった言葉は、形をなす前に消えてしまう。

体が言うことを聞いてくれない。

俯いた顔を上げることすら出来ない。

当麻の顔を見られない。

「……………」

何かを言っているが、全く頭に入っていない。

これ以上何かを聞いてしまったら自分が壊れてしまう。
そう体が思っているのかもしれない。

まるで、自分の体じゃないみたい。

心と体がバラバラだ。

手に水滴が落ちる。

ああ、自分は泣いているのか。そんな冷静な自分の声でした。

美琴は気が付いた。

体に反して、心が妙に落ち着いてきたことに。

もしかしたら、初めから分かっていたのかもしれない。

どんなことをしても、未来は変えられないことを。

どんなに足掻いても、こうなることが決まっていたことを。

だから、言いたいことは言わせなかつたくせに、

こんなことなら言えるんだ。

無理やり顔を上げて言う。

美琴「おめでとう。五和さんと仲良くしなさいよ。」

と。

涙で滲んだ目に夕日が眩しくて、当麻の表情かおが分からない。

嬉しそうな表情をしているのか、それとも困った表情をしているのか。
それは美琴には分からない。

でも、それで良かったかもしれない。

他の人を使う嬉しそうな表情も、自分のせいで困っている表情も見たくない。

だから涙も拭わずに、振り返らずに、そのまま公園を後にした。

自分の思いと、最愛の人を公園に残して。

- - -

紅かった空が、すっかり夜の黒に覆われた頃、美琴は寮に帰ってきた。

公園を出た後、どうやって帰ってきたのか分からない。

でも、いつもよりも体がずっと重いことは分かる。

これが心の重さなのかな。そう思って苦笑する。

本当に、上条当麻を失ったはずなのに、思ったよりも元気なのだから。

階段に備え付けられた鏡を見て、また苦笑する。
全く酷い顔だ。

やはり大分堪えたんだなと、まるで他人事のように思う。

自室のある3階の廊下を歩いていると、ある部屋の扉が開いて、見慣れた顔が現れた。

黒子「お姉さま、ご予定よりもお早いお帰りで……」

そう言つて黒子は絶句した。

こんな美琴は見たことがない。

今の彼女からは、生気や覇気が全く感じられない。

蒼白な顔に、真つ赤な目と崩れたメイクがその異常さを際立たせている。

黒子「……とにかく、お早くお部屋に。」

この一日で何があつたか分からないが、今の彼女を一人にしてはいけない。

黒子は少し強引に美琴の手を取ると、部屋の中に引つ張つていく。うん、という弱々しい美琴の返事と、氷のように冷たい手に驚きつつ。

部屋に入ると、美琴をベッドに座らせ、急いでお茶を入れる。

その間、黒子は自分を責め続けた。

なぜ自分は美琴についていかなかったのか。

つい先ほどまで浮かれていた自分を殴つてやりたい。

数分の後、美琴のもとへ紅茶を届けると、自分は机に備え付けられた椅子に腰掛ける。

しばらくの間沈黙が続き、おもむろに美琴が口を開いた。

美琴「私ね、今日振られちゃった……」

黒子はハンマーで殴られたかのような衝撃を受けた。

振られた？誰が？お姉さまが？

事態を飲み込むのに時間がかかったが、理解はできた。

でも、何を言ったらいいのか分からない。

言葉が見つからない。

再び沈黙が続く。

自分に何が出来るとだろうか。

励ましの言葉をかければ良いのだろうか。

でも、それを彼女は望んではいない、そんな気がする。

また美琴が弱々しく口を開く。

美琴「ねえ、黒子。…人生って一体なんだろうね……」

黒子は悟った。

彼女は今、私では到底理解の出来ない程の悲しみを抱えている。

そんな彼女に自分にできる事など1つしかない、ということ。

黒子は立ち上がると、ベッドまで近づき、美琴を抱きしめる。

黒子「人生が何の為にあるか、ですか。それはきっと、大切な人を、こんな時に、強く抱きしめる為なんじゃないでしょうか？」

美琴の肩が震える。

今の美琴に必要なのは泣くことだ。

彼女は誰よりも強い。

だからこそ、どんなことでも受け止めてしまう。

どんなに辛く、どんなに苦しく、どんなに昏いことでも。

だから黒子はこれ以上は何も言わず、ただただ、美琴を抱きしめていた。

美琴が抱えきれない分を、吐き出してもらったために。

美琴が抱えきれない分を、自分が一緒に抱えるために。

-
-
-

妖精「使うか？」

蹲っていた美琴の目の前に、白いハンカチが差し出される。

しかし、彼女はそれを受け取らずに立ち上がった。

その目には、もう涙は浮かんでいなかった。

妖精「君にはもう聞くまでもないだろうが、後悔はないか？」

彼女は一度目をつぶってから口を開く。

美琴「全く後悔はしていない、って言ったら嘘になるけど。」

そこで一度区切って、そして言葉を続ける。

美琴「初めはこんなに苦しい思いしなくてすんだのにとか、色々思っただの。」

でも、そこを否定するのは違うって気づいたの。

その時は辛かったり、失敗だなんて思ったとしても、それがなかったら、今の私がここで笑ってないって、

そう思ったら後悔することなんか一つもないって思ったの。」

彼女の顔はすっきりとしていた。

妖精「参考までに聞いておくが、彼のことはまだ好きなのか？」

美琴「きつと、一生好きだと思っわ。」

一生片思いね、彼女はそう言って微笑む。

美琴「でも片思いでもいいの。私が2人分愛するから。」

妖精「そうか…」

そう言うと、妖精は窓の方へ歩いていく。

美琴「今までありがとうございました。」

その背中に向かつて感謝を述べる。

妖精「なに、礼には及ばない。」

妖精はこちらへ振り向く。

妖精「私は機会を与えたにすぎない。

過去は拒むものではなく受け入れるものだ、

答えを見つけたのは他の誰でもない、君自身だ。

そして、君は未来へ進むための鍵を手に入れた。」

最後に何か言いかけたが、それを飲み込む。

妖精は言い終わると、右手を上げる。

今まで薄暗かった世界に、窓の外から光が差し始めた。

彼女は前に進むと決めた。

過去の全てをその身の一部とし、未来への意思に換えて。

後悔しない人生を歩むために、顔を上げて、新たなスタートを切る。

あの人指を鳴らせば、それが合図だ。

私の、本当の意味でのスタートが切られる。

パチッ！！

御坂美琴の新しい人生が、今、その産声を上げた。

思いを告げれば結婚できますか 6 (後書き)

最後まで書きつつ、やっぱりハッピーエンドが良いかなーなんて、思っていました。

ご意見があればお願いします。

嘘をついたら笑ってくれますか(前書き)

上条さんの心情です。

嘘をついたら笑ってくれますか

暗闇に包まれた公園のベンチに一人の青年が座っていた。

先ほどまで灯っていた月光も、今は雲の陰に隠れてしまっている。それだけで街灯が灯っているにも関わらず、いつもよりずっと暗く感じる。

当麻「何で…なんだろうな…」

青年の顔には困惑の色が浮かんでいた。

事の始まりは今日、2月14日の午後3時すぎ。

大学に進学した青年を待っている定期試験の勉強のため、自室に引きこもっていた。

間近に迫ったピンチを回避するため、いつもより3割増しで取り組んだために、かなりの疲労を感じた青年は、切りのいいところで休憩を取ることにした。

誰から教わったのかは覚えていないが、疲れたときにはチョコレート、
ト、
ということ、板チョコをかじりながら一息つく。

そんな時に、携帯電話がメールの着信を知らせる音を奏でた。

こんなときに誰からだろう。

青年はそう思つて携帯電話を手に取り、送り主と用件を確認する。

それは御坂美琴からが自分に会いたい、という内容だった。

それを見た青年の顔色が変わった。

代わつたと言つても、ごく近い者でなければ気が付かないほど小さな変化だ。

おそらく、本人でも気が付かないほどの。

さて、本文を読んだ青年は彼女の目的をなんとなく理解した。

今日はバレンタインデー。

高校時代、毎年クラスの男共に追い掛け回され、嫌でも覚えた日だ。そして、その意味も。

今まで散々鈍感だのなんだの言われてきた青年でも、さすがに分かった。

この後起こるであろう事が。

それを考えるとなぜだか複雑な思いがした。

普通ならば喜ぶところだろうが、そんな感情は起こらなかつた。

むしろその逆のような、不安に近い感覚だった。

分からない。なぜだか分からないが、それを受け入れてはいけないような気がした。

今日、呼び出してまで何かを渡そうとしているのだから、

彼女は自分のことを憎からず思っているだろう。

じゃあ自分は？きつと憎からず思っている。

ならこんな感情になるなんておかしい。

深い仲になるかは決まった訳ではないが、きつと今よりも距離は縮まるだろう。

当麻「ああ、そうか。」

青年は気が付いた。

自分は彼女と一緒にいることが恐いんだ、と。

彼女にはいつも笑っていて欲しい。それは嘘偽り無い本心だ。

そして、彼女の笑顔を守るためなら、いつでもどこへでも駆けつけて、

どんな困難にも立ち向かう。

だが一緒にはいられない。

自分がどれほどの不幸体質なのか、それは自分が一番分かっている。

彼女との距離が近くなればなるほど、不幸が彼女にも降りかかる。

彼女はきつとバカな考えだと、自分は平気だと、そう言うだろう。

でも、自分はそれに耐える自信がない。

自分のせいで誰かが不幸になるなんて考えたくもない。

再び携帯電話が音を奏でる。

その理由を確認して、美琴への返信を書き始める。

そして約束の時間、ある決意を持って約束の公園へと向かった。

そして、彼女に告げた。

当麻「俺は美琴のチョコは受け取れないんだ。

その…五和と付き合うことにしたんだ。」

心が痛い。

彼女の肩が震えている。

その目からは涙が止め処なく溢れている。

美琴「おめでとう。五和さんと仲良くしなさいよ。」

そう言い残して、彼女は公園から、自分から逃げるように去っていった。

しばらく呆然としていた青年は、足元に落ちている紙袋を拾い上げ、ふらふらと近くの木製のベンチへ近づき、腰掛ける。

当麻「なんで…なんだろうな…」

彼女を傷つけることは分かっていた。

そして、その覚悟はしたつもりだった。

あんな顔をしないで済むようにしたかったのに、結果、彼女を深く深く傷つけることになった。

これでは本末転倒だ。目も当てられない酷い有様。

だけど、これでいいんだ。

自分を無理やり納得させる。

きつと嫌われたらうな。

俺のこと、怒ってるだらうな。

でも、それでいいんだ。

心の傷が治るまで、俺への怒りが覆っていてくれるなら。

そして、傷が治ったら自分のことをなんでもない、記憶から消え去っていくその他大勢にしてくれれば。

それでも、彼女の危機には駆けつけるんだらうな。

そう考えて苦笑するが、すぐに元の暗さが顔を覆う。

当麻「五和に悪いことしたな。勝手に名前出して、付き合っているってウソまでついて。」

美琴になんと返信しようかと考えてたとき、五和からメールが届いた。

内容は美琴と同じようなものだった。

そこで五和の名前を出すことを思いついた。

酷いことだという自覚はある。

でも、それがベストな選択だったとも思った。

先ほど五和にも急用が出来たとウソをついて、断りのメールを送った。

当麻「ほんと…俺って最低な男だったんだな…」

自分を責める。

これは立ち直るまでかなりかかりそうだな。

それでも、自分の罪を背負っていかなければ。

「かみやーん、こんなところでなに黄昏てるにゃー。」

そんな決意をしたとき、どこか気の抜けた声があった。

素直になれば覚悟ができますか（前書き）

上条さんと他2人です。

素直になれば覚悟ができますか

上条当麻は声をかけた主へちらりと視線を向けた。

当麻「ああ、土御門か。お前こそこんなところで何やってるんだよ。」

高校時代のクラスメイトであり、学部は違うが大学の同窓生である青年に尋ねる。

土御門「何ってこれから…かみちゃん、暇なら一緒に来ないかにゃー？」

当麻「あー、悪い。今遊びに付き合うような気分じゃないんだ。」

土御門「別に遊びに行くわけじゃないぜよ。…ほら。」

土御門はポケットから折りたたまれた紙を取り出すと、それを広げながら当麻に手渡す。

当麻「これって外出届じゃないか。用事って外部でなのか。」

土御門「そうだにゃー。きっと今のかみちゃんには必要なことぜよ。」
そう言うと土御門は当麻の腕を掴むと、無理やりベンチから立たせた。

当麻「お、おい！俺はまだ行くななんて言ってないぞ。」

土御門「いいからついてくるぜよ。…っと、かみちゃん、忘れ物があ
るにゃー。」

当麻の腕を掴んでいない方の手でベンチに置かれた紙袋を指差す。

当麻「…ああ、そうだな…」

少し言いよどむように返事をした後、それを手に取り、
半ば諦めたような顔で土御門の後をついていった。

-
-
-

学園都市を後にして、歩くこと10数分。

その間当麻はあまり口を開かなかった。

土御門が他愛のないことを話し続け、それに相槌を打つ程度だった。

土御門「さーて、到着したぜよ。」

着いた先は小さいながらも歴史を感じる教会だった。

当麻「何で教会なんだ？」

どの宗教の派閥にも属していない青年にとっては、
ほとんど関りのない場所につれてこられ、首を傾げる。

土御門「かみちゃん、今日はバレンタインデーぜよ。」

それで説明は十分だと言いたげな顔をして、

土御門は教会の敷地内へと進んでいく。

それを見た当麻は一つため息をつき、土御門の後を追った。

当麻「これって、ミサってやつか。」

教会の中はまるで異世界のようだった。

何百ものろうそくの明かりに照らされた教会の内部では、パイプオルガンの伴奏に合わせて十数人のシスターたちが賛美歌を歌っている。

幻想的な光の中に響き渡る美声に、当麻は圧倒された。

そんな当麻を一瞥し、土御門は木製の長いすに座り、当麻もそれに続く。

並べられた椅子は空席も目立つが、それでも多くの人が座っていた。しばらくすると歌が終わり、神父と思われる初老の男性が分厚い本を持って壇上に上がった。

そこで当麻は先ほどからの疑問を口にする。

当麻「なあ、何で教会に来たんだよ？」

土御門「なんだ、かみゃんは知らなかったのかにゃー。」

茶化すでもバカにするでもなく、珍しく真面目な顔で説明をはじめた。

土御門「バレンタインデーっていうのは万国共通で『恋人の日』ぜよ。

その昔、ローマ帝国皇帝がローマでの兵士の婚姻を禁止したんだにやー。

その時、司祭だったバレンタインはその命に背いて

秘密裏に兵士を結婚させたんだが、捕らえられて処刑されちゃったんぜよ。」

ついてきているか、といったような視線を当麻に向ける。

土御門「処刑の日は、ユノの祭日であり、ルペルカリア祭の前日である2月14日があえて選ばれた、

つまりバレンタインはルペルカリア祭に捧げる生贄にされちゃったんだにやー。

このため十字教徒にとっても、この日は祭日となり、恋人たちの日となった、という訳ぜよ。」

当麻「あー、つまり、兵士の結婚のために命を張った人を称える日、って事か？」

土御門「まあ、大筋は合ってるにやー。」

一つ勉強になったと思っていた青年に声がかけられる。

小萌「上条ちゃんに土御門ちゃん、こんなところで会うなんて珍しいじゃないのですか。」

卒業式以来ですねと、彼女は驚いた顔をすぐに笑顔に変えてそう言った。

当麻「小萌先生？先生こそどうしてここに？」

小萌「先生は毎年お祈りに来てるのですよ。」

彼女は意外なことを口にした。

学園都市に暮らす人間ながら、

宗教の象徴の一つ、教会に足を運んでいるとは。

おそらく、土御門のような例外を除けば、
そんな人は数える程度しかいないだろう。

小萌「それで2人はどうしてここにいますか？」

こんな日に男2人でなんて、先生はちょっと心配になるのですよ。」

土御門「俺は先生と同じお祈りですたい。」

当麻「俺は公園にいたらこいつに無理やり連れてこられたんです。」

彼女は意外そうな顔をした。

確かにこの金髪・グラサンで、2月なのに上着の下に
アロハシャツを着ている人間がお祈りなどという殊勝なことをする
など想像できない。

小萌「不思議なこともあるのですね…」

じゃあ、上条ちゃんも公園で何してたのですか？

…もしかして女の子と一緒にだったのですか？」

彼女は少し興奮気味にそう尋ねた。

その目は容姿と相まって、まるで恋に興味を持ち出した少女のような輝きを持っていた。

「当麻「別に…ただ試験勉強に疲れたからブラブラしてただけですよ。」

その質問で当麻の顔は一瞬で暗くなった。

本当のことなど言えるはずもなく、今日何度目か分からないウソをついた。

その顔を見た土御門は、

土御門「…超電磁砲と一緒にいたんだろ、かみゃんは。」

瞬間、当麻は顔だけを土御門の方へ向ける。

その目は困惑と説明を求め、まるで迷子の子供のような目をしていた。

本当に偶然だった、と前置きをして話し始める。

土御門「正直、見る気はなかったんだが、どうも空気がおかしかったからにゃー…」

未だに困惑している当麻をしっかりと見据え、少し低い声で言う。

土御門「かみゃん、何でだ？どうしてあんなこと言ったんだ？」

当麻「…何でって、美琴…アイツとはなんでもないからだよ。」

苦しそうな顔で、言葉を搾り出す。

土御門「かみちゃん、お前にはウソツキの才能がないぜよ。ウソをつくには才能と信念が必要だが…」

かみちゃんは前者を持ってないし、後者は間違っただものを持ってるにやー。」

俯く当麻に、土御門は言葉を続ける。

土御門「俺はいろいろウソをついてきたが…大事な人を傷つけるウソだけは一度たりともついたことは無いぜよ。」

その言葉は今の当麻にズシンときた。

小萌「どうして上条ちゃんはウソをついたのですか？」

当麻「いや、俺はウソなんか…」

彼女の問いかけでますます顔色が悪くなる。

小萌「上条ちゃん、先生は…いえ、私は上条ちゃんの本当の気持ちを知りたいだけなのですよ…」

それは責めるものではなく、母が子に語りかけるような優しさと暖かさを持っていた。

しばらくの沈黙の後、当麻は静かに自身の気持ちを話し始めた。

当麻「俺が、俺が弱かっただけです…アイツと」

一緒にいるだけの覚悟がなかった、それだけです…」

そこからは堰を切ったように、次々と思いが流れ出す。

当麻「一緒にいたらアイツまで不幸になる、そう思ったら…」

情けないですよ。一緒にいたいってわがママも言えないし、

一緒にいたくないってわがママも中途半端になって…」

乾いた笑いが漏れる。

小萌「上条ちゃん、恋愛なんて自分勝手以外の何ものでもないのですよ。」

そう思っても自分本位に行動できないのは相手のことが好きだからなんですよ。」

その言葉を、当麻は噛み締めるように目をつぶった。

土御門「かみやんは超電磁砲のことが本当に好きなんだにやー。」

その問いに、軽く首を縦に振った。

当麻「でも、もう遅いよ。あんなことを言った俺のことなんて、アイツはもう…何を言っても無駄だろうな。」

自嘲するように言う。

土御門「かみやん、失いたくないものがある時にどんなにかっこ悪くても、

思い切って一歩が踏み出せるかどうかが大事なんだぜ。

可能性が残ってるうちに諦めるなんて、かみやんらしくないぜよ。」

そう言って背中を強く叩く。

小萌「そうなのですよ。過去を嘆くよりも、今はどうやってハッピーエンドを掴むのか。それを考えるのが先なのですよ。」

彼女も背中を強く叩く。

当麻は大きく息を吐く。

その顔は先ほどとは違い、何か強い意志のようなものを感じる。

当麻「俺：もう一度アイツと話したい……」

その瞬間、教会の中が闇に包まれる。

「そうか、やはりこうなったか。」

突然のことに戸惑いながら、声のした方を見る。

そこには黒いタキシードにシルクハットをかぶった男が立っていた。

チャンスで打席は回ってきますか

妖精「こうして君と話するのは初めてかな。」

タキシードを着た男はかぶっていた帽子を取り、人の良さそうな笑顔を浮かべて頭を下げる。

それを当麻は呆然と見ていたが、正気を取り戻して、時間が止まったように動かない土御門と小萌に右手で触れる。

当麻「おい、土御門、小萌先生…なんで動かないんだよ。」

しかし、いくら触れても止まったままの2人に困惑の色を隠せない。

妖精「心配はいらない。彼女たちには少しの間止まってもらっているだけだ。」

それからあまり右手を使わなくてももらえるかな。結構堪えるから。」

当麻は身構える。

自身の能力を知っている。その上ここは教会の中。

自分を狙う魔術師である可能性がある以上油断できない。

当麻「お前、何者だ？」

妖精「私は妖精だ。」

数秒の間の後、当麻は口を開く。

当麻「…ヨウ・セイ？中国人なのか？」

妖精「フェアリーの妖精だ。ピクシーやデユラハンと同じだと言え
ば分かりやすいだろ。」

当麻「嘘だ！！妖精がそんな姿のはずがないだろ！！」

なぜか声を荒げる青年。

妖精「君はいつたいどんな姿を想像しているんだ？」

まさか絵本や小説に出てくるものを想像しているのではあるまい。」

当麻「そ、そうだよ！」

少し恥ずかしそうに答える。

妖精「そうか。まあ、あのような姿の妖精もいるぞ。

ただ、大半のやつは君に触れられただけで致命傷になるから、
君が姿を見ることはないがな。」

当麻「そうか…じゃあ、あんたはどうして俺に姿を見せたんだよ。」

妖精「君が後悔したからだ。ここは私の家、と言ってもまだ10年
ほどしか住んでいないがね。

家の中で強い後悔を持った者に手を貸す、まあ私の存在意義だと思
ってくれればいい。」

当麻はよく分からないのか、ポカンとした顔をしているが、
妖精はそれを気にも留めずに話しを続ける。

妖精「『結婚相手は一番好きな人ではなく、一番目に好きな人を選んだ方がいい』」

と、したり顔で口にする者がいるそうだが、付き合っている相手が人生で二番目に好きかどうかなんて、分かる人がいるんだろうか？だが、ひとつだけ確かなことがある。

人生で一番好きな、大切な相手は失おうとする、まさにその瞬間『この人だ！』と気づくものだ。君はそれを感じたのではないか？」

当麻はまさに自分の心情そのものを体現した言葉に息を呑む。

そして静かに頷く。

妖精「そうか。それで君はどうしたい？」

当麻「どうしたいって、もう一度美琴に会って話が見たい、それだけだよ。」

その顔に迷いはなかった。

妖精「起死回生の逆転ホームランは誰にだって打てるわけじゃない。当たり前の話だが、ホームランを打てるだけの実力がなければいけない。」

それと、もう一つ重要なことがある。それは、逆転の場面で打席に立っているかどうかだ。」

当麻「ああ、俺は一回それを逃しちゃった。…でも、だからこそちゃんと俺の今の気持ちを伝えないとイケないって思うんだ。」

妖精「分かった。…ときに君は運命というものを信じているか？」

当麻「運命？…あるかもしれないけど、結局大事なのは自分の意思で決めることだろ？」

「だったら運命なんてあつてないような物なんじゃないか。」

妖精「そうか、つまらないことを聞いたな。

では、合言葉は『…』だ。ポーズをつけて元気よくな言ってみよう。」

当麻「…分かった。」

「一瞬嫌そうな顔をしたが、すぐに受け入れたようだ。」

妖精「では行くぞ。『求めよ、さらば与えられん！』」

当麻「ハレルヤ〜！、チャンス！！」

すると当麻の視界を眩い光が覆いつくし、

当麻「うわあああああああああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

…

当麻の消えた教会の中で妖精は椅子に倒れるように座った。

妖精「私はね、誰の手にも変えられない運命は絶対に存在すると思ってる。」

それがどんなに困難に見えても結ばれるしかない運命はあると思ってる。」

それは誰に向けた言葉だろうか。

妖精「さすがに彼を飛ばすのは無理があったか…」

そう言っつて目を閉じて、大きく息を吐いた。

- - -

美琴「今までありがとうございました。」

その背中に向かって感謝を述べる。

妖精「なに、礼には及ばない。」

妖精はこちらへ振り向く。

妖精「私は機会を与えたにすぎない。

過去は拒むものではなく受け入れるものだ、

答えを見つけたのは他の誰でもない、君自身だ。

そして、君は未来へ進むための鍵を手に入れた。」

最後に何か言いかけたが、それを飲み込む。

妖精は言い終わると、右手を上げる。

今まで薄暗かった世界に、窓の外から光が差し始めた。

彼女は前に進むと決めた。

過去の全てをその身の一部とし、未来への意思に換えて。

後悔しない人生を歩むために、顔を上げて、新たなスタートを切る。

あの人指を鳴らせば、それが合図だ。

私の、本当の意味でのスタートが切られる。

パチッ！！

…しかし周囲の様子は何も変わらない。

美琴「あの、これはいったい…」

戸惑う美琴に妖精は告げる。

妖精「こんなことを告げるのは、君には失礼になるかもしれないが」

そこで一度話を切ると了承を求める目を美琴に向ける。

彼女は無言で頷く。

妖精「ある人からの頼みでね…延長戦、と言うヤツだ。」

それを聞いた彼女瞳が揺れたように見えた。

明日晴れるかな

妖精は言った。延長戦だと。

いったい誰が…予想はつく。

でも勘違いかもしれない、そんなはずはない。

妖精「もう気が付いていると思うが、上条当麻の頼みだ。」

美琴「どうして…」

彼女はうわ言のようにそう呟く。

覚悟をしたはずだった。

でもアイツが、当麻が後悔したことがある。

そう聞いてしまっっては心が揺れる。

妖精「話をするか？」

話がしたい。

当麻がどうして後悔したのかを聞きたい。

でも、もしも勘違いだったら…きっと私は壊れてしまう。

そんな考えを察したのだろうか、妖精が口を開く。

妖精「幸運をつかむためには一つだけ条件がある。

どんなに不運を嘆いても、全く気分が乗らなくてもかまわない。
とにかくその場に参加する。これこそが幸せの扉を開ける第一歩だ。

「
幸せの扉

その言葉で私は悟った。

これはそういうことなのだ。

ならば答えは一つしかない。

美琴「分かったわ。私も当麻と、もう一度話しがしたい。」

妖精「そうか。では、これが最後になるだろう。『求めよ、さらば
与えられん!』」

美琴「ハレルヤ〜! チャンス!!」

美琴の視界を眩い光が覆つくす。

美琴「きゃあああああああ〜~~~~~」

~~~~~

当麻が目を開けると、そこは先ほどの教会のようだが、  
少しばかり様子が違うように感じる。

人がいないからだろうか、それとも明かりが窓から入る月明かりだ

けだからなのか。

誰もいない教会の中で当麻は並べられた椅子に座ると、正面に設けられたステンドグラスをぼんやりと眺める。

これから起こるであろう事を想像すると、緊張感が高まる。

数分そうしていると、後ろの方で物音がした。

ドキリとしたが、深呼吸をして落ち着いてから音のした方を振り返る。

当麻「…美琴…」

彼女は何も言わずに当麻の方へ歩いていくと、彼とは通路を挟んで反対側の椅子に座る。

美琴「私に何か話があるんでしょう？」

彼女は彼の方を見ないで話しかける。

当麻「ああ、なんて言えばいいのか…その…ごめんなさい!!」

彼は椅子から立ち上がると、腰を90度近くまで曲げて頭を下げる。

当麻「さっき…でいいのか？美琴と公園で会ったときに俺、ウソついたんだ。」

美琴「…そう、なんだ。」

彼女は少し表情を柔らかくして続きを促す。

当麻「あれは、俺のわがままだったんだ。俺と一緒にいたら美琴が不幸になっちまう。」

そう考えちまったら、ああ言うのが正しいと思ってな…バカだよな…」

それを聞き終わると美琴は立ち上がり、当麻の方へと歩いていく。そして、彼の隣に座って、今度は当麻の目を見て話し始める。

美琴「本当にバカな考えね。私がそんなことで後悔するって、辛い思いをすることも思ってたわけ？」

当麻は恥ずかしそうに頷く。

美琴「私はね、当麻と一緒にいられないって、そう言われたことが一番辛かったの…」

当麻「本当にゴメンな…」

美琴「いいの。当麻が私のことを思ってくれたことだから。それでね、私も言いたいことがあるの。」

彼女はあの公園で口に出来なかった思いを形にしていく。

美琴「私ね、妹達の事とかあって、ずっと一人で生きていくんだって思ってた時期があったの。でもね、当麻が私たちを救ってくれて、一緒にいてくれるようになって思ってたの。」

私は一人じゃ生きてなんていけないって。

誰かが隣にいて、同じ方向を向いて、私と一緒に歩いてくれる人が必要なんだって。」

当麻「美琴……」

そして、ずっと言いたかったことをついに口にす。

美琴「当麻のいない人生なんて考えられない。

当麻がいて、初めて私は自分の人生を生きたって、そう思えるようになるの。」

瞬間、美琴は当麻に抱きしめられた。そして彼女も少し不器用そうに彼の背中に手を回す。

当麻「こういうことって男が言うもんじゃないのか？」

美琴「バカね。恋愛っていうのは戦争なのよ。

ルールなんて在ってないようなものなんだから。」

そうか、と言って2人で笑いあう。

2人の笑いが止んだタイミングで当麻は口を開く。

当麻「ちよつと遅れたけど…俺は美琴を愛します。俺と付き合ってくださいか？」

美琴「喜んで！」

2人は強く強く抱き合う。



もう二度と離れないようにと思いを込めて。

すると、

パチパチパチ……！！

どこからか拍手の音が静かな教会に響き渡る。

2人は抱き合っただまま音のする方へ顔を向ける。

そこにはあのタキシード姿の男が拍手をしていた。

美琴「ア、アンタ！いつからそこにいたのよ!？」

驚いて当麻を跳ね除ける。

そして顔を真っ赤にして非難の声を上げる。

妖精「最初から、と言っておこうか。」

ますます顔を真っ赤にする美琴と、それを同じように顔を赤く染めるが、微笑ましそうに見る当麻。

今は抱き合っただけでもないが、それでも肩の触れ合う距離にいるのだから、

彼女たちの心境が手に取るように分かる。

未だに非難の声を上げ続ける美琴をよそに、男は話し始める。

妖精「ドイツの詩人、アルントは言った。

『恋の悩みほど甘いものはなく、恋の嘆きほど楽しいものはなく、恋の苦しみほど嬉しいものはなく、恋に苦しむほど幸福なこととはな

い。』と。

君たちが悩んだ時間と心は人が一生かけても手に入らない、そんな貴重なものを手にしたんだ。大事にするんだな。」

2人は一度見つめ合ってから頷く。

妖精「このタイミングで言うのは心苦しいのだが、君は覚えているか？実際の時間と3年ほどの時差があることを。」

美琴「あ…そういえばそうだったわね…ってええ！？どうなっちゃうの！？私…ええ！？」

突然のことに珍しくうろたえる美琴。

そして何がなんだかさっぱり分からず、ポカンとしている当麻。

美琴「どうなっちゃうの？このままここに閉じ込められるとか、そんな感じに！？」

それとも3年間、時間を凍結されたりするわけ！？」

当麻「ちよつと落ち着けよ、美琴。」

美琴「あ…」

そう言っつて当麻はまた美琴を抱きしめる。

すると彼女は落ち着きを取り戻したようで、小さな声で「ありがとう」と言った。

妖精「君は彼女の扱いが上手いな…さて、君が心配したようなことは、実は起こらない。」

美琴「…へ？」

美琴は素っ頓狂な声を出す。

妖精「大きく未来が変わってしまった。このままではどんな影響が出るか分からない。

そこで君には明日、2月15日に戻ってもらう。無論、未来の記憶は消してもらおうがな。」

美琴「それって、もう一度高校生からやり直すってことでいいの？」

妖精「そうだ。もっとも、記憶の上では最初だがな。

それにしても君は中々に面白い人間だな。  
最後の最後になって新しい発見が出来た。」

美琴の顔が、今度は怒りで真っ赤になる。

が、妖精はそれを無視する。

妖精「上条当麻。その手を決して離してはいけない。離してしまつては…分かるな？」

当麻「分かってますよ。俺は一生美琴を離しません！」

その問いに当麻が即答すると、腕の中の美琴も大人しくなる。

妖精「そうしてくれ。でないと私の身が危ない。」

当・美「お前のことかよ!？」

妖精「冗談だ。…そろそろ時間だ。」

そう言うと妖精は右手を上げる。

美琴「今までありがとうね。」

当麻「短い間だったけど、ありがとうございました。」

2人の言葉に薄く微笑みを浮かべる。

妖精「では、さらばだ。」

パチッ！！

指を鳴らした瞬間、2人は一瞬の光に包まれた後、元の場所へと戻っていた。

- 三年後 -

梅雨の合間の晴れの日、ある教会では結婚式が執り行われていた。

ステイル「新郎、上条当麻。汝は富めるときも貧するときも

美琴を愛し、ともに暮らしていくことを誓うか？」

当麻「はい、誓います。」

ステイル「新婦、美琴。汝は楽しいときも辛いときも

当麻を愛し、ともに歩んでゆくことを誓うか？」

美琴「はい、誓います。」

ステイル「それでは、誓いの口付けを。」

新郎は新婦の顔にかけられたベールを上げ、  
そして唇を合わせる。

ステイル「偉大なる主よ！この二人に大いなる祝福を与えたまえ！  
！」

教会の中に割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こる。

2人は今日結ばれた。幾多の困難を乗り越えて。

ステイル「以上で挙式を終了する。新郎新婦、退堂！」

神父の声で一同が教会の出口へと向かう。

外へでた2人を待っていたのは、先ほどよりもずっと大きい歓声と  
祝福の雨だった。

2人はその雨の中を歩いていく。

その手を硬く繋いで、決して離さないように。

同じ道を歩み続けるために。

-  
-  
-

誰もいなくなつた教会の中に一人の男が佇む。

その男は先ほど皆が出て行った扉を見ながら一人、話し始めた。

「奇跡の扉を開ける鍵は誰の手にも握られている。

ただ、それに気付く人はほんのわずかしかない。

運命を変えるほどの大きな奇跡は、そうそう訪れない。

『変えたい!』と思う小さな一歩を重ねることで、

いつの日か奇跡の扉は開く…

大事なことは、過去を嘆く今ではなく

今を変えようとする未来の意志だ。

『求めよ、さらば与えられん!』

尋ねよ、さらば見出さん!!

扉を叩け、さらば開かれん!!!』」

明日晴れるかな（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

**Extra：酒の席で友情は生まれますか（前書き）**

何人かの方にリクエストしていただけだったので、式後の一幕を書きました。

良かったら読んでください。



## Extra：酒の席で友情は生まれますか

### 結婚式

それは新郎と新婦に縁のある人達が一堂に会する数少ない機会だ。

2人の親族はもちろん、友人や恩師に仕事の関係者といった、普段は出会わないような様々な立場の人達がお祝いに駆けつけてくれる。

そんな場所では、ときに祝いの場ではなくなることもある。

学生時代の恩師や友人たちと久しぶりに会い、即席の同窓会になったり、

仕事関係の人同士でささやかな異業種交流を行ったりと、つまりは社交の場という一面も持ち合わせている。

中には自身の出会いの場として利用する人もいると言う。

新郎と新婦の年が近ければ、その友人同士の年も近いからだろう。

このようなことは結婚式よりも披露宴、その後の二次会、三次会となるに連れてその傾向は高くなっていく。

上条当麻と美琴（旧姓・御坂）

2人の結婚式後の二次会の様子を少し覗いてみることにしよう。

-  
-  
-

ここは学園都市の外部にあるバー。

1時間ほど前に披露宴を終え、主賓の2人に縁のある人たちが彼らの到着を前に、

招待客たちは思い思いに時間をつぶしていた。

そんな人たちが集まる店内の一角、カウンターの左端、店内の一番奥で美琴の中学時代からの親友たちが披露宴の話しに花を咲かせていた。

初春「御坂さんのウエディングドレス姿、綺麗でしたね！」

白を基調とした花柄のドレスを纏った初春飾利が興奮気味にそう話す。

佐天「初春、もう『御坂』じゃなくて『上条』だぞ。」

それをブルーのシックな感じのドレスを着た佐天涙子が笑いながら訂正する。

初春「あ、そうでしたね。」

佐天「でも、本当に綺麗だったよね。やっぱり憧れるっていうか、私も早くドレス着たいな。」

やはり女としては憧れるのだろう。

自分のそれを想像すると自然と頬が緩んでしまう。

初春「その前に、早く相手を見つけないとですけどね。」

佐天「まあ、そうなんだけどね。」

ははは、と笑い合う2人の姿は年相応で、近くに居合わせた男性たちが声をかけようかと思うくらいに可愛らしかった。

しかし、そんな2人とは正反対の人物が1人。

?「んくつ、んくつ……ぷはぁー!!」

物凄い勢いでグラスを傾ける背中が大きく開いた黒いドレスの女性。彼女の前にはすでに空になった酒瓶が数本と、かなりの数の空いたグラスが並べられている。

佐天「白井さん、ちょっと飲みすぎじゃないですか？美琴さんたちまだ来てませんよ。」

黒子「これが飲まずにいられますか!!お姉さまが…私のお姉さまが…」

あんな不潔で女性関係にだらしない、学歴も経済力も並以下のダメ人間の元へ嫁いでしまうなんて…」

そう言うと、再び酒の入ったグラスを傾けていく。

佐天「…やっぱりこうなるんだ。」

初春「美琴さんの両親への手紙のときに、ご両親よりも泣いてましたね。」

思い出すのは披露宴の最後の一幕。

披露宴のラストといえば新婦が今までの感謝を込めて、両親に宛てた手紙を読んで会場が感動に包まれる。

今回のそれも例に漏れず、美琴と両親・美鈴と旅掛が涙ぐみ、その感動のまま終わるはずだった。

しかし、白井黒子は会場にいた誰よりも号泣し、せつかくの空気を台無しにしてしまった。

黒子「一度お姉さまを袖にしておきながら…やはりあの時に息の根を止めておけば…ああ、あの時に戻りたいですの…」

場所が場所ならば、実現するほどに切実な願いだ。

佐天「重症だね。」

初春「重症ですね。」

予想通りの行動に、半ば呆れる2人。

？「ちょっと、さっきから聞いていればあ、上条さんをバカにしないで下さいよあ…！」

突然後ろから声がかげられた。

対馬「い、五和、ちょっと落ち着きなさいよ。…ごめんなさいね。

この子、ちょっと飲みすぎたみたいで。」

五和と呼ばれた黄色い着物姿の女性はかなり酔っているらしく、白いドレスを着た金髪の女性の制止を振り切ろうと腕を振り回している。

五和「私は落ち着いていますしい、飲みすぎでもありません!」

制止を振り切ってそう言ったものの、顔は赤く歩みも頼りない。

誰が見ても酔っていることは明白だった。

五和「上条さんはあ、悪くないんですう…悪いのはあ、あの女なんですよあ…」

そんな言葉に黙っていられるはずもなく、ダンッ、とテーブルを両手で叩き、黒子が彼女を睨みつける。

黒子「ちょっとあなた。それは聞き捨てなりませんわ!」

酒のせいで自制心が欠けているのだろう。

今にも飛び掛りそうな空気で2人が相對する。

五和「上条さんが優しいのをいいことに…どうせ悲劇のヒロインにでもなつたつもりで誘惑でもしたんですよあ。」

黒子「お姉さまがそんなことをなさるはずがありませんの! 大方、あの類人猿が傷ついたお姉さまの心の隙間に付け込んだに決まっていますの!」

五和「いいえ！お金とか家柄とかあ、そういう社会的なステータスを笠に着たに決まっていますう！でないと、あんな女性の魅力に乏しい人に惹かれるはずがありません！！」

黒子「妄言もいい加減にしてくださいませんの！慎ましいお胸がお姉さまの魅力だとなぜ気が付きませんの！？それに、あの類人猿だつて、ルックスは中の下程度ですし、弱みを握ってそれに付け込んだんじやありませんの？」

五和は当麻を擁護して美琴を貶せば、黒子は美琴を擁護して当麻を貶す。

そんな水掛け論が続く一角に、さすがに奇異の目が集まりだす。

初春「まあまあ、お2人とも少し落ち着いたらどうですか？」

黒子「落ち着いてますの！！」

五和「落ち着いてます！！」

佐天「うわあ、もうだめだね、こりゃ。」

初春、佐天そして対馬の3人はすぐにでもここから離れたいが、今この2人を放置しては武力衝突が起こりかねないと、離れるに離れられないとホトホト困り果てていた。

そんなところに助け舟。

建宮「まったく、こんなめでたい日にお前らは何やってんのよ。」

対馬「建宮さん！！良かった、私じゃどうすることも……」

タキシードを着崩した教皇代理・建宮齋字が加勢に来たことで、安堵の表情を浮かべる。

舞夏「そつだぞー。」

初春「土御門さん!!」

そしてもう1人、なぜかメイド服姿で式に参加していた土御門舞夏も加勢する。

舞夏「ここは私に任せるんだぞー。一流のメイドさんの技を見せてやるからなー。」

2人は並んで言い合いを続ける2人の前に立つ。

五和「いくら建宮さんといえども、今回ばかりは邪魔しないで下さい!」

黒子「土御門、個人的な事情に首を挟むなど、メイドとして有るまじき行為じゃありませんの?」

すると、2人はほぼ同時にデコボココンビに向けて威嚇を開始する。

その迫力たるや、後ろで様子を見守っていた3人が思わず後ずさりするほどのものだ。

建宮「まあ、年上の話は聞いて損は無いと思うけどな。」

少しだけ威嚇が緩む。

それを肌で感じたデコボココンビはニヤリ、と不敵な笑みを浮かべる。

舞夏「白井は知ってるかー？日本では3組に1組の夫婦が離婚しているんだぞー。」

黒子「そ、それは本当ですよ!？」

黒子は雷にでも打たれたような衝撃が走る。

舞夏「本当だぞー。それに、大恋愛で結婚した夫婦は更に離婚しやすいしなー。」

所謂『大恋愛燃え尽き症候群』ってやつだぞー。」

黒子は俯き、よろよろとカウンターの椅子に倒れるように座る。

建宮「それに五和は知ってるか？離婚した男の7割以上が再婚するらしいのよ。」

五和「ほ、本当ですか!？」

彼女にも雷に打たれたような衝撃が走る。

建宮「本当なのよ。それに、離婚した男は同じ過ちを繰り返さないように、」

前以上に愛情を注ぎ込んで幸せな家庭を築くって言うのよな。」

五和も黒子と同じように、よろよろとカウンターの椅子に倒れるように座る。



2人はのろのろとした動作で顔を上げると、お互いを見詰め合う。

そして言葉も交わずに10秒ほど経過すると、黙って頷きあう。

黒子「バーテンダーさん、『ハンター』を2つ頂けますの?」

急に喋りだしたかと思うと、30代くらいのバーテンダーに何の前触れも無くカクテルを注文した。

佐天「ハンター?」

対馬「『狩人』という意味ですね。」

その単語にいやな予感が込み上げる。

黒子「では、」

五和「私たちの作戦の成功を祈って、」

黒・五「乾杯!!」

カチンツ、と澄んだ音が店内に響く。

佐天「ちょ、ちょっと!何だかヤバい方向に進んでますよ!!何やってるんですか!?!」

初春「そうですよ!!」

対馬「五和のことは可哀相ですが、今回はやりすぎです!!」



舞夏「ウソだぞー。」

Extra:2 (前書き)

またしても書いてしまいました。  
しかも続き物で

## Extra:2

上条当麻と御坂美琴

紆余曲折あつて、2人が恋人同士になつてから2年近くの時間が過ぎた。

当麻は大学3回生、美琴は1回生。

もちろん2人は同じ大学に進学し、充実したキャンパスライフを満喫していた。

2人は学校でも有名なカップルで、その仲の良さは誰もが羨むほどだ。

そんな彼女からの呼び出された少女は人目も気にせずに大きな声を出してしまった。

佐天「上条さんが浮気してる！？それってホントなんですか？」

その言葉に、一瞬ファミレスの客たちの視線を集めたが、そんなことは気にせずに

美琴の悲しげな表情を見つめる。

美琴「私だつてウソだと思いたいわよ…でも、でも…」

彼女は震える声で、泣くのを必死で堪えているのか、肩が小さく震えている。

悲しみに染まった顔、目元にはクマが色濃く浮かんでいる。  
何日もまともに眠っていなかったのだろうか。

かなり思いつめている様子で、普段の彼女の快活な表情は見る影もない。

佐天「御坂さん…話してくれますか？辛いと思いますけど、何かわかることがあるかもしれませんし」

美琴「うん…あれは10月頃だったから、2ヶ月くらい前からかな」

彼女は少しの間後に、ぼつぼつと話し始めた。

-  
-  
-

10月の連休の数日前に当麻から電話がかかってきた。

付き合いだして一年半以上経ったが、彼から電話をかけてくることはそう多くなく、  
ディスプレイにその名前が写しただけで走った後のように鼓動が早くなる。

そういえば明日は一緒に買い物をする予定だったし、そのことだろうか。

もしかしたら連休にどこか旅行にでも誘ってくれるかもしれない。

そんなことを想像すると自然と頬が緩んでしまう。

幸せそうな笑顔だ。

当麻『もしもし、美琴か？悪い、ちょっと都合が悪くなって、明日の買い物だけで行けなくなっちまった。この埋め合わせは今度するから！』

しかし、受話器の向こうから聞こえたのは、矢継ぎ早に用件を告げてくる当麻の声だった。

期待が大きかっただけに、残念さも大きかったが、こんなことは今までになかったわけではない。

こういうときはちゃんと時間を作ってくれるし、いつもよりも優しくしてくれる。

それが当麻のよさでもあるのよね、と、またしても頬が緩んでしまったが、

そんな恥ずかしいことを悟られたくない彼女は、いつも不機嫌な声を作って返事をする。

美琴『…分かったわよ。ところで、どんな用事なわけ？』

当麻『えっと…あっ！悪い、バイトの休憩時間終わっちまった。じやあまたな』

美琴『ちょ、ちょっと！！…もう、何よ！？』

一瞬言いよんだことと、一方的に電話を切られたことで、本当に不機嫌になってしまった。

そして、それが不安に変わっていった。

美琴「そんなことはよくあったの。でも、最近は約束してもほとんど会ってくれないし、電話しても『バイトが忙しい』って言ってまともに話してもくれないの…」

彼女の声はどんどん小さくなり、最後の方は店内のBGMにかき消されてしまうほど小さなものだった。

佐天「そうですか…でも本当にバイトが忙しいんじゃないんですか？クリスマスも近いですし、もしかしたら御坂さんにプレゼントを買うつもりなんじゃないですか？」

正直に言つと、佐天には当麻が浮気をするなどは微塵も思っていなかった。

あれだけラブラブな2人が、急に醒めてしまうなんて考えにくい。

なにより彼との面識はそれほど多くはなかったが、彼が浮気をするようなナンパな性質ではないことは感じていた。

そもそもそんなことが出来るほど器用な人ではないし、きつと、美琴の考えすぎなのだと思つて前向きな意見を出す。

美琴「それは私も少し考えたの、そうだったら良いなって。だけど、悪いとは思つたけど当麻のバイト先に行ったの。当麻のシフトの日」

一瞬顔に明るさが戻つたが、話すうちにすぐにもとの暗さに立ち返



ってしまった。

美琴「でも、当麻はいなかったの。店員の人に聞いたらその日は休みの日だった。

私に内緒で何をしていたの…恐くて聞けなかったわ」

佐天はそれ以上何も言えなくなってしまった。

まさか、そんなことはないと思っていたことが起こってしまったからだ。

・  
・  
・

それから数分後に2人は店を後にした。

佐天は初春にも協力を頼み、とにかく情報を集めるということでの場を収めた。

美琴はその申し出を心強くも思ったが、それ以上に不安に溢れていた。

もしも、もしものことだが、本当に誰かと、私の知らない誰かと会っていたら…

そして万が一、ありえないと思うが、私よりもその人へ当麻の心が向いていたら…

きっと、天地がひっくり返るような確立だが、当麻が私と別れたいと口にしたら…

きつと私は壊れてしまう。

今まで積み上げてきたレベル5としての自分だけの現実が、19年という時間が作り出した『御坂美琴』という存在が、

もう二度とあんな思いはしたくない。

彼を、当麻を失うなんて一度だけで。いいや、一度でも十分過ぎる。

暗い感情と戦いながら、歩いているとおかしなことに気が付いた。

美琴「あれ？私、何で当麻を失ったことがあるって思ったんだろう？」

私と当麻は高校2年のバレンタインデーに私が告白して恋人同士になった。

それまではいろいろとモヤモヤしたが、当麻に恋人が出来たと聞いたこともなかったし、ましてやフラれたことなどなかった。

記憶がそう言っているのだから間違えはない。

デジャブだろうか、それとも混乱しているんだろうか。

考え込みながら足を進めていると、見覚えがない場所にいることに気が付いた。

携帯電話を取り出して現在位置を確認する。

どうやらいつも乗る駅をいつの間にか通り過ぎていたようで、  
ちょうど隣の駅との間にいるようだ。

そこはレンガ造りの歩道が続く、学園都市には珍しいガス燈が並んだ、特別異国情緒の強い場所だった。

周囲を見回しながら歩いていると、ある建物の前で、  
まるで足が地面に縫い付けられたように動かなくなった。

美琴「教会…こんな所にあっただ」

そう呟いた彼女は、まるで吸い寄せられるように教会の扉へと足を  
進めていた。

まるで、自分の家へ帰るような自然さで。

### Extra:3

「なんか勢いで入っちゃったけど…改装工事でもしてるのかしら」  
室内に入った第一印象はまさにそうだった。

表こそそれなりに整えられていたが、中の家具にはビニールのシートが掛けられており、  
床には砂だろうが、うっすらとたまっていた。

窓はカーテンで覆われており、夕方のまだ日が残っている時間だが、中は夜のように暗かった。

唯一ある光源はついさっき入ってきた、開けっ放しのドアだけだった。

「ここで神父さんに相談でもしろってか…はあ、当麻…」

薄暗い部屋の中で考えてしまうのはやはりあの男のことだ。

当麻とはたくさんケンカもしたし、何日も口を利かない日が続いたこともあった。

そんなときはお互いに寂しくなって、我慢できなくなって、どちらともなく仲直りしてきた。

でも、こんな一方的なことなんて…。

ダメだ、ダメだ。

こんな所でいくら考えてみてもいい考えなど浮かぶはずもない。

むしろ教会内の暗さに引つ張られて昏い考えしか浮かんでこない。

どんなに前向きに捉えようと努力しても堂々巡りをした挙句、何か当麻を怒らせるようなことをしてしまったんじゃないか、そして当麻に嫌われてしまったんじゃないか、私の他に好きな人が出来てしまったんじゃないか…

いつからだろうか。

当麻と一緒に居られるようになるになって、私はいつも満たされて共に歩いていくようになって、誰よりも強く強く、支え合うようになったのに。

私はこんなにも弱かったんだ。

「…違うわね」

そう、弱かったんじゃない、弱くなってしまったんだ。

一緒に歩いていていたはずが、いつの間にか後を付いていくだけに支えあっていたはずが、いつの間にかもたれ掛かるように、満たされていたかと思っていた心は、依存に近い状態になってしまった。

彼女はハツとして、思わず教会の中央に鎮座する、不釣り合いなほど立派な聖母像を見つめる。

「思ったよりも考え事するにはいい場所なのかもね、教会って彼女の途中で答えが一つ生まれた。

以前までの自分ならばすぐに取っていたであろう行動をするべきなのだと。

先に進むために、そして以前の自分を取り戻すために。

「当麻、覚悟して置きなさいよ！きっちり説明してもらうんだから！！！」

...

「もう、アイツは一体何なの！？」

覚悟を決めた日から3日後、御坂美琴は人目も気にせず腹の底から叫び声をあげる。

「ま、まあまあ、落ち着いてくださいよ、御坂さん」

「佐天さん、これが落ち着いていられるわけないでしょ！？」

大声を出してのどが渴いたのが、コップの水を一気に飲み干して、

「この3日間、メールは返してこないし、電話しても留守電だし、拳句の果てに電波が届かなくなるし、家にも帰ってないし、学校にも来てないし…

夜逃げしたのか……！！！！！！」

「上条さんってフラツと海外に行ったりするような人なんですよね？  
じゃあ、今回もそういうことなんじゃないんですか？」

「それはないと言い切れないけど…私に黙って行ったとしたら…」

彼女は周りに青白い稲光を纏いながら、こめかみに青筋を浮かべる。

その様子は、長い付き合いの少女に恐怖を与えるのに十分すぎる迫力だった。

「お待たせしました…って、お2人ともどうしたんですか？」

「な、何でもないよ、初春。さ、早く座って座って」

佐天は若干引きつった顔で着席を促す。

「さっそくで悪いんだけどアイツの、当麻の情報は集まった？」

「あ、はい。一応集まりましたけど…」

初春は美琴の様子の変わりように少し面食らっていた。

数日前は彼の名前を出しただけで泣きそくな表情をするくらい追い詰められていたのに…

今の彼女ならば大丈夫だと理解して、カバンの中から小型のPCを取り出す。

電源を入れてから少し操作をした後、画面を2人にも見えるように移動させる。

その画面を見た2人の表情が一瞬で曇る。

「ここ数週間の上条さんの行動を監視カメラの映像から抽出してみました」

そこに写っていたのは当麻が『女の人』と一緒にいる画像だった。

それだけならばまだ良い。

問題はそれが何十枚とあり、しかもその相手が全て違つということだ。

ある写真には腕を組む当麻の姿。

ある写真には満面の笑みを浮かべる姿。

ある写真には私にしか向けていないはずだった熱い視線を…

泣きそうな顔でそれを見つめていくうちに、美琴の中に共通点が浮かんできた。

そこに写っている女性は一樣に当麻よりも年上だと思われ、服装から察するに水商売の人たちではないかと推測した。

「この写真って…」

「はい、たぶん御坂さんが想像している通り歓楽街で撮られたものです」



「じゃ、じゃあ、当麻は私、のことを、ほったらかしにして…」  
必死で涙を堪えているんだろう。ところどころ言いよどみながら言葉を繋いでいく。

「遊び歩いていた…と推測できます」

その言葉に、美琴の防波堤は決壊した。

泣くのを必死で堪える表情のまま、唇を噛み締めて、肩を震わせて、声を出さずに涙だけを流していた。

最低の事実を突きつけられた。

浮気だったらどうしよう、嫌われていたらどうしよう…  
いろいろ考えた中で決して出てこなかった答えを聞かされた。

その事実はいくらにも彼女を傷つけた。

彼の、当麻の私への想いはたった一晚の思いに負けてしまったのかと。

悲しみと同じくらい情けなさが込み上げてきた。

「御坂さん…」

その様子を2人の友人は見守ることしか出来なかった。

今何を言っても彼女の悲しみには太刀打ちできない。

「私、ちょっと、行くところが、あるから、先に、帰るわね」

美琴は席を立つと、おぼつかない足取りで店から出て行く。

「御坂さん…」

「佐天さん！このまま御坂さんを行かせちゃダメですよ！すぐに追いかけてみましょう」

一連の流れにボウツとしていた2人は我に帰ると、すぐに支払いを済ませて美琴の後を追う。

2人が『おつりはいりません』と言ったのは後にも先にもこのときだけだろう。

しかし、店から出てあたりを見渡しても彼女の姿は見当たらない。

「私はこっちを見てくるから、初春はあつちを見てきて」

すかさず二手に分かれて捜してみるが、それでも姿は見当たらない。

「おかしいですね、すぐに追いかけたはずなのに…いったいどこに行ってしまったんでしょうか」

軽く息を切らせながら言う。

「電話も…出てくれないし」

電話をかけても留守番電話につながるだけで、電話に出る気配がない。

「御坂さん、大丈夫でしょうか…」

「大丈夫だと思うよ…きっと、御坂さんなら」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5596n/>

---

とある魔術の大作戦

2011年8月11日10時06分発行